

ぶどうの木

第 35 号 (2010 年 5 月発行)

目次

巻頭言

八幡前田教会創立七十周年記念礼拝

榎本和義牧師

母を語る

長田 正幸

御言に始まり、御言に終る

宇戸田由美子

暗闇の恩寵

貞 サユリ

私の散歩道

三好 翠

海上で死戦を彷徨うも

伊規須 太郎

奇跡的に生還

信仰雑感(二)

首藤 正

何を考え、何を見ているのか。

尼田 隆己

イスラエル・聖書の世界を訪ねて

正野 眞宏

八幡前田教会「十大ニュース発表」

正野 眞宏

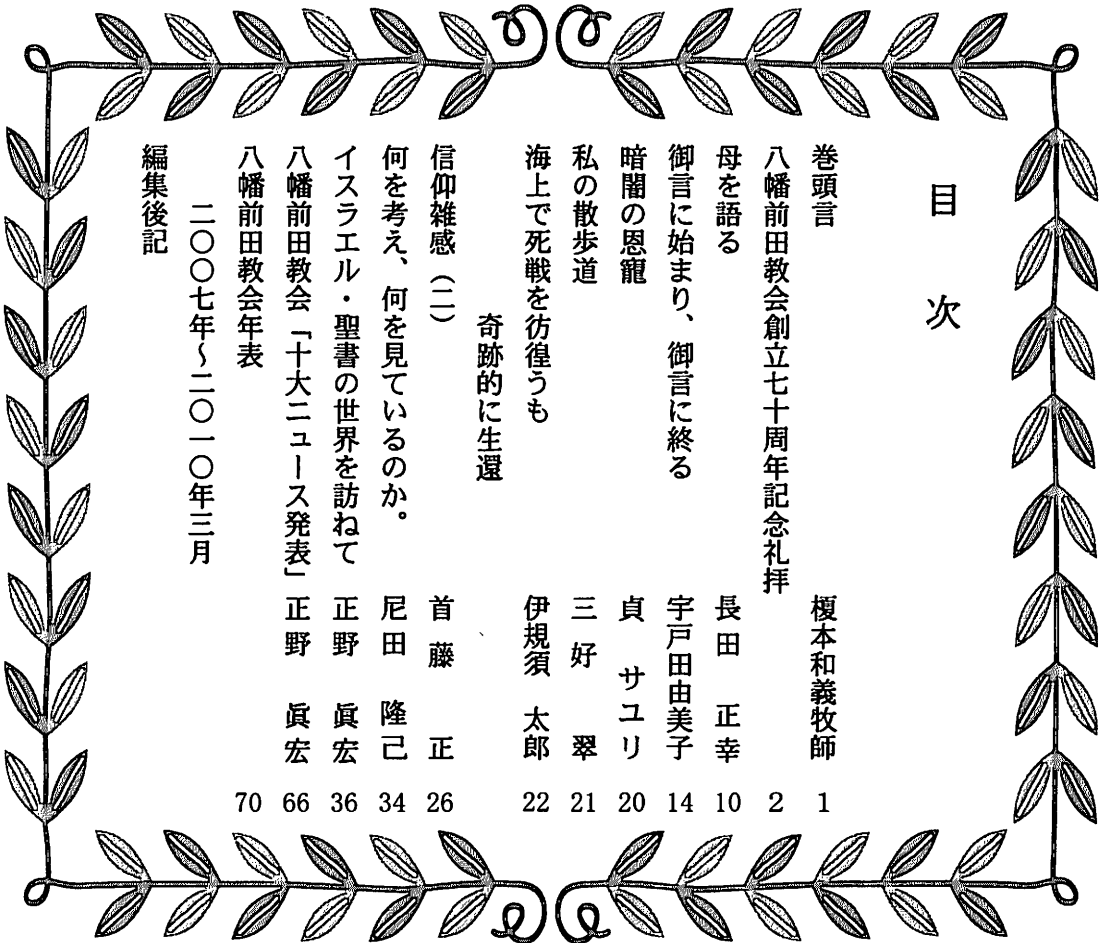
八幡前田教会年表

70

二〇〇七年～二〇一〇年三月

編集後記

66



八幡前田教会
基督伝道隊
福岡大濠公園教会
戸畑教会

巻頭言

榎本和義 牧師

「わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。そしてあなたの知らない大きな隠されている事を、あなたに示す。」(エレミヤ三三章一〜三節)

ここに掲げた聖言は、八幡前田教会の創立50周年記念礼拝で語られたものです。時は一九八九年十一月三日のことです。と言うことは、昨年(一九八九年)十一月で20年が経過して、満70年となったわけです。あまりにはやく年が過ぎるので、そんなに年月が経つたとも思わずにいましたが、「ぶどうの木」を編集しているときに、はたと気がついた次第です。誕生日で言えば「古希」を迎えたことになりました。

昭和十四年(一九三九年)十一月に、榎本利三郎牧師が河本家で行われていた家庭集会へ専任者として遣わされたことによつて、「八幡基督伝道館」が発足しました。太平洋戦争が始まろうとする時局混乱の時期でしたが、はかり知ることの出来ない神様のご計画によつて、北九州での牧会伝道の拠点が置かれたのです。爾来、七十年にわたつて聖言が語られ、主

の救いと恵が証しされてきました。多くの人々がイエス・キリストに出会い、人生が変えられました。その事は五十周年を記念して出版した『燃ゆる柴』にまとめられています。さらにそれから二十年の歳月が過ぎました。この間の事を振り返つても、そこに多くのドラマを見ることが出来ます。巻頭の聖言のように私達の想像だにできなかった二十年であったと思います。主は真実に約束どおり御業を行つて下さいました。

この間の事どもを語っているのが、この「ぶどうの木」です。今年で35号となります。少なくとも一年に一度は発行したいと願いますが、なんとかここまで支えられ、導かれてきました。既刊のものを読み返すと、その時々(の)色彩や臭いまで甦ってきます。それはただ単に出来事の羅列ではなく、神様が何をしてくださったか、主にどのように仕えたかなど、信仰の道程を明らかにしています。

今回もそのような恵のあかしを集めた一里塚をすえることができて感謝です。しかし、これはこれまでのまとめであつて、すでに次なる道行きが始まっています。先立つて進まれる主を見つつ、力を尽くして与えられた道を前進しましょう。そして、次にはもっと大きな感謝の石塚を建てようではありませんか。

主の祝福をいのりつつ。

八幡前田教会創立七十周年 感謝記念礼拝

二〇一〇年四月二十九日(木) 午前十一時

説教 榎本和義 牧師
奏楽 小仲章子 姉

前奏(黙祷)

讃美歌 一九一番

讃美歌 一六二番

主の祈り

交読 詩篇一三五篇

祈禱

讃美歌 五一三番

説教 イザヤ書四三章八節〜十三節

讃美歌 三八〇番

頌栄 五四一番

祝禱

後奏



記念礼拝説教

牧師 榎本和義

「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」(イザヤ書四三・十三)

〈七十周年記念の意義〉

八幡前田教会は、一九三九年十一月三日に創立されました。ですから、昨年十一月をもつて七十周年を迎えたわけであり、ます。数カ月遅れましたけれども、主がどんなに大きなことをしてくださったか、主の前にはつきり告白しなければならぬことを示されましたので、今日この日に、感謝記念礼拝と感謝会を持つことにしました。

七十年という年数は、実に意味のあるものでありまして、世間でも七十歳になると古希、古代稀なりと言ってお祝いします。そういうことも無きにしもあらずですが、聖書では、イスラエルの民がバビロンに捕囚され、七十年を経て解放された、いわば解放を告げる恵みの年であります。勿論、この七十年だけが恵みというのではなく、私共にとりましては、一年一年が「今あるは、主の恵みによりてなり」(第一コリント十五・十)、主の恵みであります。この七十年に集約した形で、主に感謝したいと思うのであります。

この十三節に「わたしは神である、今より後もわたしは主である」とありますが、私達に与えられている信仰とはどんなものであるかについて教えられたいと思います。世の中には沢山のキリスト教会がありますが、私達の群の教会の信仰と

は何なのか、をはつきりさせておくことは、この七十年を迎えるにあつて意義ある事だと思ひます。

〈八幡前田教会の信仰の源泉〉

この十三節の御言は、私達の信仰に大きな影響を与えている。柘植不知人という伝道者の信仰の中心的な御言です。

柘植先生は、バックストン先生によって信仰に導かれ、献身なさり、全生涯を主に捧げて伝道なされた。そしてできたのが、基督伝道隊という群です。その時は、組織というものがなかった。明治・大正時代の教会は、ほとんどが諸外国の宣教師からの宣教師派遣や援助によつて形成されていきました。ところが、この基督伝道隊はそういう組織によつたのではなく、柘植先生たった一人で始められたのです。

バックストン先生自身も、たった一人で日本に來られて伝道なさいました。先生は英国の名門貴族の出身でありました。ケンブリッジ大学時代に有名な大衆伝道ムーデーの説教を聞いて新生の体験をされ、何とかこの福音を伝えたいと祈っていたところ、明治時代の日本へ行けという使命を与えられたので、どここの組織にも属さず、私財を投げ打つて、単身神戸に來られました。

神戸での伝道の後、もつと辺境の地で伝道したいとの願ひ

から、山陰の米子・松江に行かれました。当時の山陰は伝統的な因習に満ちた地で、片言日本語の外人が来たと言うので、随分ひどい迫害や罵詈雑言を浴びせられなさったけれども、祈り祈って、伝道を続けられた結果、先生の教えを聞きに人が来るようになりました。松江に赤山という所がありますが、先生の信仰を学びたいという若者が、そこに全国から集まるようになり、そういう群ができました。

当時のキリスト教の流れとして、全国的に札幌とか、横浜・熊本などに群(バンド)ができましたが、山陰にもバックストン先生を中心とする松江バンドができたわけです。この中から、竹田俊造、堀内文一、御牧碩太郎先生など日本の代表的な伝道者が輩出されました。

その信仰の中心は、「聖きよめ」ということです。聖書の標準、神様の御心に適う者になるということで、日本の福音派と言われる源流となるものでした。その松江バンドの仲間によつて「日本伝道隊」という団体ができてまいります。植先生はバックストン先生が開かれた神戸の湊川伝道館でこの福音に接し、一晩で救われなさった。そして先生はそれまでの生涯を捨て去って、キリストに従う生涯に全く変えられたのです。

その後、現在、塩屋にある関西聖書神学校の前身となるわ

けですが、神学校というより、信仰の修養の場でありまして、そこに先生は入られ、信仰の訓練を受けられました。

そこで訓練を受けられた後、関西地区の刑務所伝道であるとか、警察署のクリスチャンたちを導くという伝道をしたり、あるいは各地のまだ無牧の開拓中の伝道所に派遣されて働いておられましたけれども、あるとき、神様が先生に聖霊を注いでくださった。このことは先生の自叙伝とも言うべき『ペンテコステ前後』に書かれておりますが、堺の伝道所での御用が終わって神戸に戻ろうと、今のJR大阪駅で列車を待っていたときに、聖霊のバプテスマを受けられた。もちろん、聖霊はそれまでも先生の中に働いておられました。駅のホームで列車を待っているときに、本当に神様の愛が溢れてきたのです。うれしくて、うれしくて、独りでに笑いが込み上げ、それが止まらなくて、そこで踊ってしまったと言います。「恐らく見ていた人は、チョット、気がおかしいのではないか、と思われたに違いない」と書いておられます。そのくらいに、うれしくなりました。

そして、この喜びを何としても伝えたい、という訳で、それまで「日本伝道隊」というバックストン先生の弟子たちと共に行動をしていましたけれども、自分にだけ与えられた一つの大きな使命があることを悟ったのです。これは神様の導き

であります。それで先生は、その仲間から離れてたった独りになりました。

これは大きな力です。私はしみじみとそのように思います。が、神様の力は人が寄り集まって力を合わせて何かするところに現れるのではないのです。独りになったときに、神様が力を現してください。

世の中の人は、そうは言いません。「一人よりも二人、二人よりも三人、できるだけ仲間を多くして事業をやっていけば、大きな力になるじゃないか」というのが、世間であります。ところが、柘植先生が願ったのは、「私に対して神様が何を求めていらっしやるのか」、仲間と一緒にになって、共同で何かをするということよりも、私に神様が求められることがあるに違いない、ということでした。その聖霊の喜び、御霊による喜びを体験した先生は、ここから皆と一緒にという道は歩めなくなつたのです。

そして、お独りで東京の落合で伝道を始めました。それから先生が召されるまでほんのわずか三年半、イエス様の公のご生涯の年数と同じですが、その間に、日本中にこの柘植先生の伝道によって多くの人々が救われた。二十幾つかの群の伝道館が、全国に創り出されたのです。

〈福岡基督伝道館〉

その一つに、福岡大濠公園教会の前身である「福岡基督伝道館」がありました。その伝道館に、柘植先生の弟子であつた折瀧鶴次郎牧師が、まだ三六歳ぐらいで遣わされました。若いときの折瀧先生は、向学心に燃えて東京の大学に入る準備をしていましたが、飯田の伝道館で開かれた柘植先生の特別伝道集會に出て、イエス様の十字架のご愛に触れてご自分の生涯を捨て、献身なさいました。その後、境港であるとか、米子であるとか、そちらの方で伝道をしておられました。やがて同じ伝道者の奥様と結婚なさいました。五人か六人のお子さんと与えられ、末の子は乳飲み子という状態で、福岡に遣わされて来られたのです。何も生活の保障はありません。力ある団体があつて、そこからサポートを受けるわけではありません。何があつたか？ 信仰だけです。聖書のお言葉を信じて、「神様が私たちを遣わしてください」という信仰だけです。

この福岡には、私の母の遠縁に当たります末永の家族がいます。この当主が柘植不知人先生の信仰に触れて、何としてもこの地にこの福音を伝えたい、そのために自分の建物や地所を捧げて伝道館を……という願いから、遣わされてきたのが、折瀧先生であります。

そして、折瀧先生が昭和三年に福岡の地で伝道を始めまして、やっと落ち着かれたと思われる昭和六年に、突然のごとく一人のガリガリにやせた、頑固そうな青年(私の父)が承諾もなくやって来て、「これから献身させていただきます。先生の所へ置いてください」と言つて来たというのですから、行くほうも行くほう、受けるほうもびっくりしたと思います。しかし、父はその年の新年聖会で新生の体験をし、なんとしても神様のご愛に報いたいとの一念で、一切仕事も辞めてやつて来てしまった。自分の身の回りの物、行李(こくり)一つ抱えて玄関先に立つておつた。「帰すにも帰せないから」というわけで、そのまま献身修養生として八年間、本当に畑仕事から台所、掃除、洗濯、子守から何から何まで、本当にその生活のなかで主に仕える道を学ぶ訓練を受けたわけです。

そこで何を体験するかと、これが私たちの信仰の原点でありますけれども、この十三節に「わたしは神である、今より後もわたしは主である」とあるように、「わたしが主である」と言われる神様がおられて、この神様がすべての事を力ある御手をもつて導いておられる。だから、人の力や人の業や人の努力によるのではない、ということを体験する。これが私たちの成し得る事柄、しなければならぬこと、またそのために

選ばれ召された者である。これが私たちの信仰であります。

〈眞の教会とは〉

ですから、教会という一つの組織を想像します。皆さんでも、「教会」という言葉を聞くと、尖塔の形や十字架などを見て、「あ、あそこは教会だ」と言いますが、教会は建物ではありません。確かに教会という建物ではありませんけれども、それは私たちの信仰ではない。じゃ、そこに集まった人たちが教会員になって、それぞれ教会を組織として運営していく、できるだけ人数を多く集めて、教会として「世の光」「地の塩」となって、社会事業や福祉事業とかを行い、世の役に立つ、あるいは教会員がお互いに助け合う互助会的な組織、そういうものを作り出していくことが教会だ、と思っている教会が数多くあります。

しかし、柘植先生がお独りでこの福音を携えて立ち上がったのは、決してそのような組織を作り、そういう互助会的な、あるいは趣味の会、クラブのようなものを作り出そう、という目的ではないのであります。

柘植先生は基督伝道隊というものを作りましたが、そこには一切の組織らしいものはありませんでした。何々運営組織だとか、委員会であるとか、何とか会であるとか、いろいろ

なものを作つて、そして皆で相談し合つて、協議して、何か運営方針を決めていこう、ということは一切排除してしまわれた。

じゃ、教会とは何かと？ 教会というのは、キリストを信じるそれぞれ一人一人が教会です。

イエス様がピリポ・カイザリヤ地方に行かれたときに、弟子たちに「人々はわたしのことを誰と云うか」と言われました。それに対して弟子たちは聞いたことを言いましたけれども、あらためて「それでは、あなたがたはわたしをだれと云うか」(マタイ十六・十五)と問われたとき、ペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と告白したのです。それをイエス様は大変喜んで、「ペテロ、あなたは岩だから、あなたの上に教会を建てよう」と言われた。ところがカトリックでは、ペテロの上に教会が建つ、ペテロが教会の基となるという解釈をして、ペテロの墓の上にサンピエトロ寺院というバチカンの中心となる教会を建てた。しかし、イエス様は何も「ペテロの墓の上に教会を建てよ」とおっしゃったのではなく、ペテロが告白した信仰に立つ、そこに教会があるのです。

教会はキリストの体であり、それを信じる者がキリストの体になるんだ、ということ。だから、教会というのは建

物でもなければ、組織でもなく、実はそこに集う私たち一人一人が教会なのです。皆さんお一人お一人が、キリストの体なんです。だから、パウロが言っているように、「各自は互に肢体だからである」(ローマ十二・五)。ある者は手であり、ある者は目であり、ある者は足であるかもしれない。しかし、すべてがキリストの体であり、「手だからお前は体ではない」とは言えません。また、「わたしは体だから、わたしこそキリストの全てである」とも言えません。というのは、体はいろいろな機能が総合されているものだからです。

実は私たち一人一人を、神様が御言によってキリストを内に宿す者としてくださった。そこがキリストの教会なのです。だから、「自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であつて、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである。あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ」(第一コリント六・十九、二十)と、パウロは言いました。いうならば、私たちの魂、私たち一人一人が教会です。その教会は、イエス・キリストを「あなたこそ、生ける神の子キリストです」と信じる信仰によって成り得るのです。そして、そのキリストを信じる一人一人が、一つ一つの小さな教会である。私たちがこうやって集まったこの集まりこそが、教会なんです。

それで集まって何をするかと？ 何もしない。神の御霊によつて一つとせられていくのです。それぞれがキリストの体となつて、頭であるキリストの靈に導かれ、また従ひ生きるのです。

私はアメリカに参りましたときに、日曜学校の讚美の中に「ユー　アー　ザ　チャーチ　ウイ　アー　ザ　チャーチ」という歌詞がありました。「あなたが教会であり、私たちが教会である」という意味です。これは私たち一人一人がはつきりと、イエス様が私の内に宿っていると信じて、私はキリストのものである、と告白することです。

その私たちが造り、生かし、救いに導きいれた神様は、どのような御方か？

この十三節に、「わたしは神である、今より後もわたしは主である。わが手から救い出しうる者はない。わたしがおこなえば、だれが、これをとどめることができよう」とあります。神様が私たちの主でいらつしやり、神様がすべての事を力ある御手をもつて備えて導いてくださつておられる。その神様を私たちが体験していくこと、教会はそこにあるのです。キリストを頭とし、私たちはそのキリストの体となつて、イエス様がこの地上に在りしときに十字架の死に至るまで父な

る神様に仕えなされたように、私たちもキリストの肢体となつて、その信仰に立つて神様を証詞していく。今も神様はご愛をもつて私たちを顧みてくださつて、私たちの主となつてくださった御方です。

へ八幡前田教会の始まり

この十節に、「あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである」とありますが、私たちは神様の証人として選ばれ、召され、立たせられているのです。この前田教会の一番根本にある信仰の土台は、ここです。私たち一人一人がキリストを内に宿す者となつて、神を証詞していく生涯。神様が今も働いておられる、生きて業を成し給う御方であることを信じていく信仰です。

ですから、柘植先生もたったお独りでその事を始めました。そのときの先生が掲げられた御言が、この十三節の御言でした。この御言に立つて、お独りで主の証詞人として語り続けられたのです。それを受けて福岡の折瀧先生につながり、そしてその信仰を受け継いで、私の父である榎本利三郎牧師がこの八幡へ派遣されて来ました。

父がここへ派遣されたとき、福岡の教会から何がしかの月々の援助があつたわけでは全くありません。全く空手で、

ただあるのは「聖書一巻」です。まだそのとき弱冠三十歳になるかならないころだったと思いますが、福岡から八幡へ来ていよいよこれからというとき、「八幡駅のホームに立ったときに、足が震えた」と語っています。五十年史をもう一度ひもといていただいたら、よくお分かりのことと思います。

それから父がしたことは何かと言うと？それは祈りです。エレミヤ書の「汝、我に呼び求めよ、我、汝に応へん。また汝が知ざる大いなる事と秘密(かくれ)たる事とを汝に示さん」(二三・三文語訳)との御言を握って祈る。その祈りを通して、神様が働いてくださる。たった独りで、そのとき河本さんのご家族が備えられておりましたが、そのご家族と共に祈っているうちに、神様がポツリポツリと次々と救われる人を起こしてくださったのです。やがて戦争が終わり、昭和二三年でしたか会堂が与えられ、そして今に至るまで本当に多くの人々がこの所に集って人生を作り変えられたこと、これは数かぎりがありません。

いま皆さんのお手元に、「教会年表」をお配りしましたけれども、振り返ってみると、実に多くの人々がこの恵みにあずかってきました。それは榎本利三郎という一人の人を通して神様がわざを成してくださったことであると同時に、私たちにもその使命を与えてくださっているのです。

〈私達の信仰のあゆみ〉

どうぞ、私たちもいま、「わたしは神である、今より後もわたしは主である」とおっしゃるこの神様にしっかりと心を結びつけて、そして、誰の力によるのでもない、本当に祈って祈って、神様の力を体験していく。私どもが「神様は確かに真実な御方です。愛に満ちた御方です」ということを、どうぞ、私たちの生活を通して味わい、また、それを現していきたい。現すといつて、大声で宣伝して回れ、というわけではありません。私どもが本当に喜び感謝している、そこに主が働いてくださる。多くの人々に、今なおこの恵みを注いでくださる御方があります。

どうぞ、もう一度このところから新しく思いを整えて、更に神様のご期待に応えていく者とならせていただきたい。そのように切に願っております。

ご一緒にお祈りをいたしましょう。

母を語る

長 田 正 幸 (前田)

母 長田ユキノ

一九〇二年 (明治三十五年) 四月一日生まれ

長崎県南高来郡土黒村 (現雲仙市国見町) 宮田で誕生

一九七五年 (昭和五十年) 十二月十五日 没

一 母から聞いたこと

母は、新聞に眼を通し、ラジオのニュースにも関心を持っていた。

一九五二年 (昭和二十七年) 四月初旬、私の中学三年の新学期が始まろうとする直前。雨でも降っていたのであろうか、母は電灯の下で一心に縫い物をしていた。

「日航木星号遭難」のニュースがあった。「飛行機が行方不明になったげな。八幡製鐵の社長さんや大辻伺郎が乗っくらしたげな」と詳しく説明してくれた。私が難聴のためラジオの内容をよく聞き取れなかったからである。

そして母は問わず語りに話をした。田舎弁まるだしである。

「おらネ、若いころ神戸に働きに行つとったンよ。紡績会社じゃった」

「(※姪の)キミエさん、クニエさんと一緒だった。おら、体ばこわして辞めた」(※姉妹。母は男二人・女六人の兄弟姉妹の下から二番目で、姉の子供の姪と年齢が近かった)

「勤めていた折、洋裁を習った。その後 (体が良くなったのであろう) 思い立って東京に出ることにしたとたい」

今度は、和裁の修業をしたそうである。どれほどの期間かは聞き漏らした。

実家に帰省して後、そこから二キロ雲仙岳の方向に上った父のところに嫁入りして来たのであった。

当初の約束では、農業はしないで、仕立て屋をやることになっていた。(実際、はじめは何人かの針子に対して指導していたらしい)

しかし、「その約束は反故にされた」と言った。「本当は、こげん縫い物ばして、暮らしたかったンよ」。

父が農協の仕事に専念せざるを得なかったこと、子供が次々生まれたこと、戦争が始まったことなどが重なり、子育てと、百姓仕事に絞らざるを得なくなったと述懐した。

話は一転して、私の将来のことにふれ、

「わら、耳の悪るかせんね工。コツコツと一人で仕事するのがよかろうと思うちよる。神戸のおじさん（キミエさんのご主人）に頼んでみようかね。鉄に字ば彫るとヨ」

一日中、口を利かずにすむ仕事で、本を読むのも嫌いではないようだから、お前にピッタリだと思うという趣旨であった。私は、それもいいかな、と思っていた。中学三年になろうとする息子に、この機会に打診しておこうという意向のようであった。

しかしその話はそれきりで、その後なにもなかった。他の兄弟と同じく、少なくとも高校までは進学させようとの父の方針に従ったようであった。因みに、父母ともに小学校卒である。私の小学校の同級生十九人中、高校進学は五人である。

そんな状況であった。

二 母の苦勞と人情

二〇〇五年（平成十七年）、父母の法事の際、兄弟の一人から「わが父、わが母」と題して、兄弟七人、各人が書くのではないかと提案した。前述の「母から聞いたこと」は私が書いたその折の一部分である。少し添削している。同じ小冊子に長兄・保が「わが母」として載せており、以下に引用する。

戦時中の母は、苦勞の連続だった。

米作りの田植え、田の草取り、稲の病害虫防除など、すべてが人力・手作業であり、今のようない便利な機械・肥料・農薬などはなかった。

母の腰が曲がるのは当り前である。家族の生活は、節約しても経済的な余裕はないし、休む間もない。農作業の仕事はまことにきついものであった。

ここでそんな暮らし世情のなかでの母のエピソードを記す。

本当の名前は知らなかったが、兄が「コーシ」、弟は「ボーイ」という。みんながそう呼んでいた。なんだかあだ名は、中国人とアメリカ人みたいであるが、八斗木（注、雲仙の麓の地名）で生まれ育った兄弟である。

当時の二人の年齢は、五十〜六十歳位だったろうか。百姓するにも田畑もなく、赤原（地名）の山中に住んでいたようだ。とても人間は住めないようなボロ家である。昼間は二人で野山をさまよい、食い物などを採っていたのだろうか。時々、里にも姿を見せていた。

悪童たちから、からかわれたり、石を投げられたりしてい

た。弟の方は、いつもヨダレを垂らしていた。

貧乏のどん底・社会の底辺に生きるこの兄弟が来ると、母は、父の古着などを着せてやつたり、握り飯を作って食べさせたりする。

「あまりむどがれば（可愛がれば）しょっちゅう来るぞ」と私がいうと、母は、

「ぐうらしか（可哀そう）たい。なにかやると、うれしがって、そうにや（大変に）よろこんじよつとでエ（喜んでいるとでエ）」と言つて、自らも喜んでいた。

もう戦後だったと思うが、冬の寒い日の夕方、烏兎山から母と二人で枯れ木、枯れ柴を両方尖った棒（おうこし）負う子（と称した）で突き刺し、肩にかついで家に帰る途中、長い下り坂を歩き、鳥居のあるところまで来た時、コーシとボーイに出会った。兄弟二人ともしゃべることができなかつたのか、声を聞いたことがなかつた。

兄のコーシがもつていた杖で、弟をつついて、母の肩の荷をかわつてかつげと、指示していたようだった。あわてたように弟が、「アーアー」といいながら、母の肩から荷をうばいとるようにしてかついだ。足はヨロヨロしていたようだが、普段もそんな足取りだったし、そのようにしながら結構

かついできた。泥淵の橋の岐路まで来たとき、母が、「もう近いからよかよ。ありがとう」といっても、放さず、数度のやりとりで、ようやく手放した。

別れてしばらく歩き、後ろをふりかえったら、二人は並んで見送つていた。
（長田保記）

三 母の臨終

一九七五年（昭和五十年）、母は亡くなった。七十三才余であつた。

六十歳代のはじめガンに冒され、大学病院で治療を受け、その効により五年以上経過、治癒したかにみられていた。

しかし、すい臓に転移していて、その発見が遅れたらしかつた。そのため、取り返しのつかぬ状態になつていた。二年余、近くの総合病院で治療を受けたが、いよいよ死期が迫つてゐる状況となつた。ガンは激しい痛みが伴うらしかつた。

一両日持つかどうかとなり、付き添いとして義姉と私が交代で当ることになつた。

夜更け、母は十分ほど昏睡していて、ゴホゴホと口が動く、茶色の胃液を吐く。苦しげに吐く。それを受け皿に取るのが私たちの役目であつた。

吐き終わると、そのたびごとに、気がついたように、

「まっちゃん、(世話をかけて)悪かね」と詫び言をいう。

「いんにゃ(否)」と、毎回答えた。

また昏睡状態に陥るのであった。

夜がまだ明けきらない時刻、義姉の担当のとき、「息が途絶えた」と私は起こされた。おだやかな顔であった。

夜明けとなり、牧師をしていた次兄がやってきて、母の頭に手を置き、ブツブツと何かを唱えていた。それが終わり、兄は大粒の涙をポロポロと流した。

私はそばでもらい泣きすることもなく眺めていた。悲しい気持ちで湧いてこないのが不思議であった。母は痛みで苦しがついて、それから解放されたのだと、安堵の気持ちが多少あったのかも知れないが、今もよく判らない。

清い心、あたたかい心を持つ母は、その生涯を閉じたのであった。

葬儀が終わり、北九州の自宅に帰り、ふとんに横になって、寝付かれずにいると、しきりに母の姿が浮かんで来た。

以下のようなことであった。

梅雨時であった。終戦後、私は小学校三年か四年であった。母は、水田の準備であげ(畦)造りの作業を終え、帰ってきて

たところであった。疲れきったようすが顔や体に現れていた。ばつちよ笠(竹の子の皮を干したものでつくったもの)を取り外し、蓑を脱いでいた。髪は、汗と雨のため額にべつとりと付いていた。

やがてドクダミを煎じたお茶を、わん(碗)に注いで飲んだ。私にも渡し「飲め」と言った。ひどくにが味がした。

母は重労働で苦勞していた。父は農協の組合長であり、農地改革委員長を兼ねていて忙しく、農作業の大方は母にのしかかっていたのである。長兄は学徒動員から帰っていて手伝っていた。

そのほか、朝早く起きて、子供の朝餉と弁当を支度する姿。(旧制中学・女学校・新制高校登校には片道一時間半、中学には四十分を要したので、四時早々には起きなければならなかった。子供七人が次々と続いたのである)

夏の水田の草取りの姿。秋の収穫で脱穀機を操作する姿。昼休み、畳にコロンと昼寝している姿。わら草履造りやむしろ織りの姿。私がマラソンの現役選手時には、卵料理とうなぎ料理を作ってくれた姿、(この二品がスタミナ源の最たるものと母は思い込んでいた)等々、浮かんでくる。

そして滂沱と涙を流したのであった。

繰り返すようであるが、彼女の一生は、農作業と子供の世話のために、働きづめの一生であった。その中であって、コースとボーイをはじめ、恵まれない弱い立場の人々に、慈悲深さを発揮したのであった。

母は、浄土真宗の親鸞上人に深く帰依していた。

母の死に際し、子の一人である牧師から、主イエス・キリストに対しとりなしがなされ、彼女を嘉され賜うことを祈禱したに違いない。

異教徒であったので、天国に迎えられたかどうかはわからないが、すべてを知り給う主によって、祝福されていることを私は信じているのである。



御言に始まり、御言に終る生涯

宇戸田 由美子（前田）

八幡前田教会に集うようになりまして、現在一年四ヶ月ほどになりますでしょうか。幾度となく、兄弟姉妹に「ぶどうの木」にお証を書かれてはどうかと勧められて、時が過ぎて行きました。果たして、私の証は前田教会にとって益となるかどうか、長い間気持が固まりませんでした。文章を書きます事は、私にとって特に負担ではありませんでしたが、慎重に時を待ち続け、今回ようやく、中から動かす力が与えられました。

私は、二〇〇一年十二月二三日クリスマス礼拝の時にインドネシアにある JICE「ジャカルタ日本語キリスト教会」で洗礼を受けました。

まずは、その当時の信仰告白をお証し致します。

救いの証

私は、二〇〇一年四月に、娘と三人でインドネシア首都ジャカルタの地に降り立ちました。主人は二年ほど前にチレゴ

ンに赴任しており、結婚してから仕事の関係で離れて生活する事もすっかり慣れていました。

日本には家もあり、仕事も持ち、娘も地域に馴染んで育ち、長女の七瀬も十四歳という年齢で日本を離れるなんて考えてもいませんでした。けれども、いつも何かに不満を持ち、心満たされる事なく、孤独でした。去年の冬に、こちらに行く事が急に決まり、今考えますと、何かに導かれたようにこの地に参りました。

日本では一人で子育て、仕事、家事と頑張っていました、正直言つて疲れ果て、年齢的に何か仕事をしなければ、社会生活に遅れるのではないかと何かに焦り、不安で目的も無く、ただ毎日を時間に追われて過ごしておりました。

思い切つて、この地に来ましたが、主人の勤務するチレゴンには長女の中学校がなくて、私達三人で初めての海外生活が始まりました。主人は毎週末に、自宅に帰宅をしています。

ジャカルタには一人の知人も無く、私は知り合いを作ろうと行動し、近所の山内姉を紹介されました。とてもご親切な方で、熱心に教会生活をされておられ、教会にもお誘い頂きましたが、信仰を持つ事なんて、無縁だと思つておりました。

キリスト教とは、まったく言つていいほど、無縁な環境で私は育ちましたから。今年の八月になつてから、生活に慣

れる事に必死で、夏休みの計画を立てていなかった私は、周りに誰もいなくなり、子供とどうやって過ごそうかと慌てました。

「そうだ、家庭集会に行こう」と、以前から誘われていた「CCC」の家庭集会に行く事を思いつき、間島牧師先生のご紹介で、平野姉の家庭集会に集いました。当時夏休みの時期であり、牧師先生は不在で、平野姉宅で神学生の野口先生にお会いしました。私のような初心者に気後れしないように配慮をされ、なぜかその日に、聖書が語られる御言葉が私の耳に入りました。その日をさかいに目が覚めた思いでした。

自分の聖書が欲しくなり、すぐに取り寄せ、その後は間島先生のご指導がありました。短期間のうちに今日の日を迎え、イエス様が私の救い主と信じ、信仰を告白するに到りましたが、これは聖書を読み始めてから、知識ではない何か見えないう力が働き、御言葉が私に宿り、今救つていただけなければ、間に合わないと思つたからです。

信仰を持つという事は、人から勧められる事ではなく、自分で決心する事で、私の時が満ちました。

今まで神を恐れず、自分勝手な行動をして来ましたが、過去の罪を認め、悔い改め、昨日までの私は死に、今日から生まれ変わります。

あのまま日本に居たなら、決して出会う事がなかったであろう信仰、人との出会い。追われるように、この地に来た事実。神の導きがあり、私は現在、ジャカルタでもとても幸せになりました。いつもイエス様がそばにいらっしゃる事が分かったのです。

当てにならない自分の感情に惑わされる事なく、自分の為だけに生きる事を辞め、もう自分自身が生きているのではなく、イエス様の為だけに生きて行きます。

『もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。いま私が生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです』(ガラテヤ二・二十)

最後に、いつも声をかけて下さった JJC の皆様、間島先生、私をこの地に導いてくれた主人、愛してやまない娘達に感謝致します。

「神様、この地の果てるまでに、永久に続く揺るぎない信仰の確信を私に与えて下さい」。

受洗後の信仰生活

二〇〇一年十二月二三日に受洗しましたが、洗礼式にて大

胆に語った信仰告白を今読み返しますと、本当に恥ずかしいですね。

しかし現在までも、目に見えない内に信仰を熱く持ち続けている事を主イエスに感謝し、与えられた紙面を通し、数年ぶりにお証を致します。

その年の家庭集会で御言葉が心霊に入り(マルコ四・四十)、世の中の出来事や出会い、生命の神秘など、解決出来なかった事が聖書を読み始めてからすべて私の中でつながり、創造主なる神は必ずいると確信しました。

JJC では、御奉仕活動、家庭集会、教会学校、聖歌隊など、楽しく信仰生活を三年以上送りました。

基本的なクリスチャン生活も身につけ、娘達も教会学校などに集い、信仰を持った事を誇りとしていました。主人には、私がバプテスマを受ける決心をしたおり、日曜日の主日に教会に集う事、献金の事、葬式の事、バプテスマ式の時は、夫として必ず見届けるように、信仰を持つ意味を誠意をもって伝えました。

夫はまだ救われていませんが、祈りの中、主のものになる確信を主から頂き、現在は喜んで時を待っています。救われるにはそれぞれ時があるのです。

JJC で信仰告白しましたが、当時はクリスチャンになつ

てもまだ肉の属性も強く、買物や、学校の春夏冬の休みには、近隣の外国に家族旅行、さまざまな習い事、世の事を楽しんでいました。

しかし、信仰を持ってから、価値観がすべてにおいて変わり、人の付き合いはほとんど信仰を持っている方だけになりました。簡単に言えば他の事に興味がなくなったという事でしょうか。

私は個性も強く、失敗の多い者ですが、初めての海外生活は水を得た魚のように適し、この紙面では書ききれないほど、経験、交わりがありました。また機会があるのであれば、インドネシアでの恵まれた信仰の環境、生活の環境、さまざまな問題などのお証はたくさんあります。

一番の信仰者としての思い出の地は、カリマンタン島（ポルネオ島）赤道直下にあるポンティアナック州です。この地は強烈な記憶が残っています。

アンテオケ宣教会派遣の日本人女性伝道師がおられ、当時高校生だった、七瀬を伴い訪問を致しました。若いインドネシアの青年達が五年課程の神学校を学び終え、献身者になり、卒業後国内に伝道を広める為に散って出て行きます。女性伝道師は神学校の教師を兼ねながら、現地の神学校の青年や牧師達と協力しあい、伝道、日本からの支援の橋渡しなど、さ

まざまな働きをされている、主から選ばれた一人の献身者です。戦時中、日本人が現地の方を虐殺した場所に案内され、こんな南国の最果ての島にまでたくさんのお悪事を重ねた様子を見て、日本人の国民性を恥ずかしく思いました。

首狩り族の末裔が住んでいるロングハウスという長屋の住居を訪問しました。約二〇〇年以上前に建てられた一三〇mもある長屋のような共同住居です。

見た様子を文章でどう表現したらよいのか、当時の写真でしか説明は出来ません。異文化生活様式を見た貴重な思い出の場所の一つとなりました。ロングハウスの近所にあった商店を営む家で（この家もクリスチャンの家庭でした）現地風なもてなしを受けたりと、どこの国よりも私にとって益となつた旅行となり、撮っている写真を見てよく行けたなど当時のチャレンジャー振りに我ながら笑ってしまいます。

ジャカルタは大会ですが、当時カリマンタンは、お湯のシャワーを使うまでは生活基盤が整っていなくて、水のシャワーを浴びました。三日もすれば水の冷たさにおのずと慣れ、慣れていく事も楽しく記憶に残っています。

クリスチャンになったからこそ、受け入れてくれる環境があり出来た貴重な思い出です。

インドネシアは、日本のマスメディアが報道されるような

過激なイスラム教のイメージがあると思われませんが、大半は穏健なイスラム信者も多く、身分証明証には迫害の恐れもあるので、イスラムと表記していても、実際は日曜日には教会に集うクリスチャン数も多い事も驚きでした。

カリマンタン島はマレーシアと国境も分け合い、このポンティアナツク州は、教会がちらほら点在しておりました。(過去に欧米からの宣教の名残りであり、牧師不在の教会もありました)。現地の礼拝も集いましたが、見えないイエスを見上げ、御言葉は世界共通だったくの違ひもなく、讚美し、御言葉を聴く教会で、インドネシアの教会は讚美する教会、韓国の教会は祈る教会、日本の教会は考える教会だと聞いていましたが、その通りの礼拝スタイルの教会でした。

ジャカルタから本帰国をし、教会を探し続け、さまざまな試練と、旅路を重ねました。以前、住んでいた家も売却し、持ち帰ったのは、主イエスを知る者となった信仰だけでした。その後、主人の再度の転勤、娘たちの学校問題など、さまざまな事が家族でありました。

教会を探す度に、賛美歌が違う、礼拝スタイルが違う、祈り方が違うと随分違和感を覚え、苦しい日々でした。けれども、患難を通り過ぎると最善の道になっており、苦しい日々

に出会いがあり、出来事があり、その事は私にとって必要な事だったと今は実感しております。

『なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして、希望は失望に終ることはない』(ローマ五・三―四)。

この御言葉は、読んでもはつきりと悟る事が出来ませんでした。今はこの御言葉の深みを悟る事ができ、自分は主から見れば本当に足りない者だと知り、主から愛されている者の一人であるという事を知りました。

おわりに

信仰生活の第一章はインドネシアで始まり、信仰生活の第二章は聖霊の内住の実際認識からですが、今は証の時ではなく、今後主から応答があれば証する事もあるかも知れません。

一日は朝の祈りに始まり、主日から一週間が始まり、新年聖会から良き一年のスタートを切る恵みにあずかりました。

今年に入り、木曜日に集うようになって来ました。昨年から集い始めたのですが、木曜日は個人的な信仰の学びに必要上、韓国語を習っております。

他の曜日の教室を探し回りましたが、私に適した場がなく、

本当に困ってしまいました。無理する事なく、自然と選んでいききました。どちらかを選択したという事です。自動車で十五分ほどの距離に、御言葉を聴く場所が備えられている恵みを選びました。しかし今後はどのようなかは分かりません。主が与えて下さった道を選択し選んでいくだけです。

私は家族で信仰を受け入れた最初の者です。

先日、母が私に信仰告白を致しました。もう、かれこれ八年以上伝道しています。母の日にはいつも花を贈る習慣でしたが、その年にインターネットで聖書を注文し、いきなり日本へ送りつけました。奇跡的に毎日聖書を読み続け、主を完全に信じていますが、その先は分かりません。今後も最善を尽くして伝え続けます。

過去に、さまざまな地、教会で洗礼を受ける方を、立ち会う機会が与えられました。その姿を見る度に、どんなに主が喜ばれる事だろうと感動を覚えます。私自身も、毎日おこる事なく御言葉に立ち還ろうと気持ちを新たにし、信仰生活の年数ではないと、出会った国の信仰者に教えられました。

今瞬間を、いつでも、どこでも見ておられ内面をすべて見通される方を知っただけでも恵まれた者です。一方的に私達は選ばれて恵まれた者ですが、祝福は求めなければ得られま

せん。生涯、見えない祝福を得る為に求め続け、聖書に書かれている御言葉を読み、聖書が書かれた真の目的は何であるのか、主イエスの御心を知りたいと、信仰を全うすることを切に祈っております。

私の証しを読まれた方は、“どん引き”しないで何とぞ普通に接して頂ければ幸いです。証を書く事も導きであり、書き進めるうちに文章でも主に用いられることもあるのだと思ひ至りました。

証する力を中から与えて下さった、主イエス様に感謝致します。

「アルファとオメガ、始めと終わり」(黙示録二二・十三)。初めて教会に足を踏み入れた時に知った御言葉です。永遠に続く道を、御言葉が始まり、御言葉で終わる一日、一週間、一年、一生を、私は私らしく御言葉を根拠に、御言葉を自分の内に備え、今後も淡々と続けていきたい……と、お証し致します。



暗闇の恩寵

貞 サユリ(前田)

昨年(平成二十一年)十月、十一月は、検査入院や、いろいろと体調が狂ってしまい、「祈りなさい」と、神様の憐れみの中に過ごしてきました。

下手でお恥ずかしい短歌です。山口で過ごした徒然の思いを、したためました。

- 妹と 共に過ごした 幼き日
昔を思い、夜な夜な語る
- 妹と 接して思う 心遣い
愛が一杯 涙が出そう
- 点滴の ポトポト落ちる しずく見て
検査を思い 涙に似たり (入院)
- 友と会う 約束したのに 果たせずに
電話で会話 慰めてくれる (同窓会)
- 次々と 点滴ばかり 絶え間なく
憂き日もあれど 生きる喜び

- 気にかかる 郵便ボックス 花の水
気持あせつても 時を待つのみ
 - 久々に 窓より眺む 雨の音
霜月迎え 寒くなりたる
 - 臥しいても 御霊の声に がばと起き
聖書開きて 主との交わり
 - 妹の 帰る姿を 見送りつ
主を信じてと ひたすら願う
 - 点滴を 変える度ごと 数かぞえ
中腰背伸び 薬名メモル
 - 聖日を 覚えて今日も 床の上
聖書を読んで 祈りのひととき
 - 病院に 毎日通い 身の廻り
心配りの やさしき妹
 - ペンケース 4Bの鉛筆 ふと見つけ
廊下の端で スケッチ楽し
 - 山口の 見慣れぬ風情に つい見とれ
SLの音 ポーと聞こゆる
- 頭の中で、賛美の歌詞が走馬灯のように浮かんでいきます。
本がないので、思い出しながら小声で歌いました。

聖歌四二三番 「告げよ主に」

「告げよ 主に。告げよ今

内にある悩みを 御恵みに富める主は 聞き給わん

親しく主の許に、降ろせなが 重き荷の全てを

御恵みに富める主は 取り給わん残らず」

（往きてイエスに告ぐ（マタイ十四・十二））

リバイバル聖歌六三番 「もはやなど恐れん」

「わが世に旅路いかに 険しくも恐れじ

主はわがそばにしまして 御助けを給えば

もはや我 など恐れん 主に救われたる今

もはや我 など恐れん 主はわが良き友なり」

（たとい死の影の谷を歩むとも、恐れじ（詩篇三三・四））

神様に選ばれ、導かれて何十年。長いばかりで、信仰はヒヨコ。これからも毎日御言葉を食べ、試練の襲来を恐れず、いつもポジティブでありたいと願っています。



私の散歩道

三好 翠（前田）

散歩というより、初めは有酸素運動のつもりで歩き出しました。場所は団地の横に流れている川で、幅は五メートルくらいですが、長さは果てしなく、紫川に続いています。

春は桜、夏は緑、秋は桜の葉が紅葉して、本当に美しいです。冬はちよつとですが……。

普段は犬の散歩、買い物帰りの人くらいですが、今は桜が満開で、土、日曜日はどこから来られるのか、カメラを持っている人、写メをしている人、たくさんです。

私は毎日、午前、午後と二回、四十分〜五十分歩いて、桜を楽しんでいます。ずーっと桜を追っていると果てしがなく、疲れるのも忘れて歩いています。満開なので、空も見えないくらいです。また、健康を与えてくださっていますので、運動をしながら楽しませていただき、幸福に浸っています。

このように、良い所に住まわせてくださっている神様に、感謝しています。

海上で死戦を彷徨うも奇跡的に生還

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

忘れもしない、一九四一年十二月八日、真珠湾攻撃の報道は、海軍兵学校(第七三期)生徒として聞いた。入校わずか一週間後のことで、身が震えた。戦時特例により繰り上げ卒業、四四年春には青年士官として、巡洋艦阿武隈(あぶくま)に乗り込んだ。事情があつて、若年記録だった。阿武隈を含む第五艦隊の艦艦(もうどう)たちは、(本州最北端、青森県下北半島の)大湊港を圧していた。北方の堅い守りだった。

風雲急を告げると、艦隊は南に向かい、一九四四年十月、日米決戦に参加した。ミンダナオ海をひたすら東進し、十月二五日深夜(払暁)、米輸送船団をめぐり、スリガオ海峡から(レイテ湾に)突入した。しかし、待ち伏せ攻撃を受けて被雷、司令部機能は、配下の駆逐艦霞(かすみ)に移され、本艦はひとり戦列を離れざるを得なくなつた。警護のため、駆逐艦潮(うしお)がつけられた事は幸いだつた。(後に我々の命を救ふこととなつた。)

傷つきながらも、その日は攻撃をしのいだが、翌朝から米

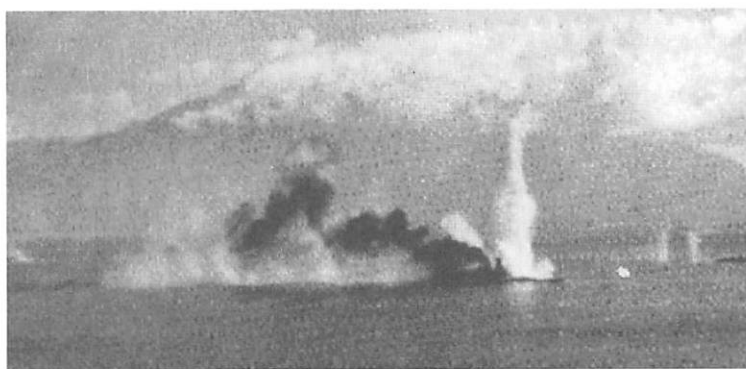
航空部隊(約三十機ほど)の波状攻撃を受け、死傷者が続出、特殊爆弾(瞬発信管による水平飛弾)を浴びて、上甲板の者はほとんどなぎ倒された。

私もその一人で、こめかみの動脈をコサギ落とされ、血ダルマとなつたから、「伊規須は死んだ」と思われたらしい。しかし、気づいた時は止血帯がしっかり巻かれ、結局、命を取り止めた。誰の仕業か分からなかつたが、高い姿勢でいたと思われるその人は、おそらく次の弾幕でなぎ倒されたに違いない。命の恩人に感謝する暇もなかつた。

翌二六日昼過ぎ、わが阿武隈はパウ(艦首)を天に向けた後、スツと波間に消えた。私は流れ出る重油の帯にも入らず、沈没の渦にも巻き込まれず、味方駆逐艦潮(うしお)に吸い寄せられるように引き上げられたのは、幸運だった。気が付けば、左手三指にも、右太ももにも負傷していた。北緯九度のその辺りは水深三千メートルに近かつた。フカの餌食にはならなかつた。

狂気の地獄にあつては、血みどろの中に寝ても、死体に枕しても、何も感じなかつた。戦争は感覚を麻痺させるから、恐ろしい。軍医がちぎれて散乱している手や足(肉片)に、付箋を結んでいた。病名は「全身粉碎」とあつた。この世の有様

ではなかった。私も幽霊だった。



レイテ海戦と巡洋艦阿武隈（インターネットから収録）

あれから六五年、右太ももの弾片は摘出されないまま、どうかするとゴロゴロして、右を下にしては寝にくく、重いトランクを右手には提げにくい、その都度、レイテ戦を思い出し、この命は特別な賜物であると感謝する。

艦が沈んで負傷者が浮いても、見捨てられることがある。救助している内に、自艦がやられるからだ。しかし潮は、命がけのゴーストアップを繰り返して、私達を救ってくれた。

マニラでしばらく待機した後、空母隼鷹（じゅんよう）に便乗して佐世保に帰投すると、そこには「建造中の駆逐艦樺（けやき）の艤装をせよ」との辞令が待っていた。乗組み予定者として最終仕上げに参画せよという訳である。休む間もなく浦賀に急ぎ、その完成を待つて通信士兼航海士となった。艦は五三駆逐隊に編入され、まずは急ぎ訓練に励んだ。

（その後の樺の船団護衛、警備行動などについては省略）

一九四五年八月、終戦になっても、しばらく海との縁は切れなかった。武装解除した樺に仮設の居住設備を急造して、海外残留邦人（二百万余）をピストン輸送した。一航海で、わずか三百人程度、不経済な輸送だった。燃料の重油は、米タンカーから補給を受け、「終戦処理費」というチケットを切った。私の身分は、第二復員省事務官となっていた。

それまでに両親は、横浜から先祖の地（宗像）に帰っていた。一九四七年初め、そこに私が帰ったのである。当時の農村は、

溢れる人々を飲み込んだ。余り物でも屑物でも、何かしら食物があつたからである。

農業の真似事をしていた頃、胸を悪くしてしばらく病臥し、本気で悩んだ。振り返れば、それまでの数年、純粹な気持で踏み出した生涯がポツキリと折られ、捻じ曲げられ、これからどうして生きていったらよいかと考えたのである。

ある日、父の旧知の老伝道者が、一枚のパンフレットを置いて帰った。それに(オリオン星座の恒星)ベテルギウスの事が書いてあつた。「あの星は、直径が太陽の三百倍(つまり地球の三万余倍)もあるのに、鉛筆の先で突いたほどにしか見えない。人間は地上の事にアクセクしているが、遙かに高く広い世界があり、それら全てのものの上におられる方がある」と。

私は少し前まで航海屋であつて、天文航法(星座)は商売道具だつたから、頭をガンと強打されたように目が覚めた。母の勧めもあり、ボロ自転車を踏んで田舎道を津屋崎教会まで通つたのが二、三回。その後、北九州に職を得て下宿し、近くの教会の早天祈祷会に出席した。それが八幡前田教会だつた。主の奇しき導きは、ほむべきかな。

子供の頃、東京(現、武蔵野市)で近くの日曜学校に行つていたから、復活と言えないこともないが、その時は母任せ、

しかし今度は本氣だつた。

早い時期から献身の志はあつたが、実行は遅かつた。齡すでに四七歳、一九七三年二月二七日、社内の隠れクリスマスチャン達からの「頭をブン殴られました」というメッセージをあとに、最後の勤めを終えた私は、その夜の祈祷会に直行して、献身を申し出た。事務員から「失業保険の不受理証明書を出しましょうか」と言ってきたが、「失業ではなく棄業だから、証明は(保険も)いらぬ」と断つた。

修養(学院)の後、同じく献身者であつた妻と結婚したが、子どもはなかつた。

若年性認知症になつた彼女を十数年介護して、「痴呆(当時)はこう言つた。今は認知症は神様の賜物」と知つた。妻は痛みを感じる事が少なく、私は優しくなり、また遅しくなつたから。そして二〇〇七年二月十三日、看取りは終つた。彼女は七五歳だつた。

「戦争はいけない」と言うことは易しいが、根は深い。今、車椅子に乗り、介護される身となつて、新しい視点から発見することが多い。

鰥夫(やもお)・六無斎(注)である私は、三次の戦争を体験しつつある。最初は弾雨戦争、次が高齢(痴呆介護)戦争、最後は死に方戦争である。

産まれる時は母に苦勞をかけたが、新生児には意識はなかった。しかし死ぬ時は、多分親はなく、自分で死に方を選ばなければならぬ。私は、勝利生・満足生を目指したい。そして、人生のサイズを大きく生きたい。それは永遠に繋がるものであり、創造主によってどのように造られているからだ。

難問山積の世、皮相の論議が多く、悲しみは尽きない。新聞には赤色の感嘆符!などが荒々しい書き込みが踊る。

瀕死のわが身を柵に上げ、他人を生かそうと祈り悶える。この命、惜しむべきか?

預言者ハバククの祈り(旧約聖書ハバクク書三章二節)は、私の祈りでもある。「このもろもろの年の間に、汝の業を生き働かせたまえ、このもろもろの年の間に、これを現したまえ、怒る時にも憐れみを忘れたまわされ」。

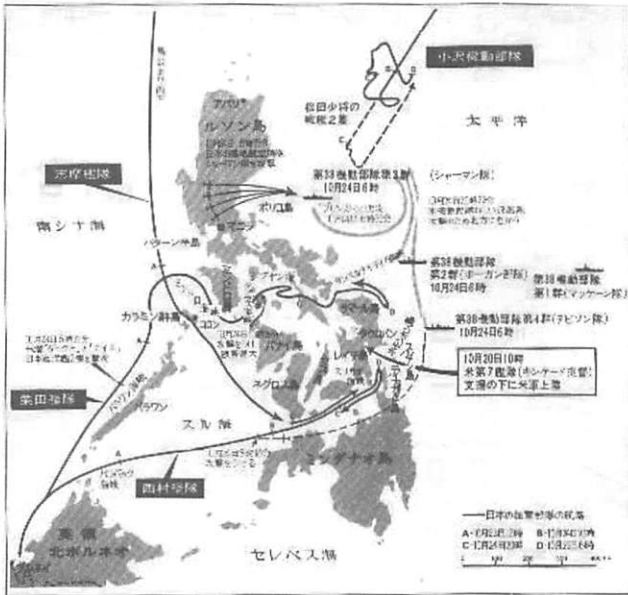
〔注〕林子平の号、海国兵談の絶版を命じられた時の作

「1親もなく、2妻なく、3子なく、4版木なし、5金もなければ、6死にたくもなし……」。

私は、最後の6が違う。死を恐れたり、避けたりせず、む

しろ喜び勇んで、凱旋したい。委ね切って、日々使命を果たすのみ。この分なら、創世記五章の先輩エノク氏のように死を見ぬまま天に移されるかもしれないが、そうでなくても構わない。なぜなら、それを決めるのは、わが愛する主だから。ハレルヤ!

〔この文章とほぼ同一の内容が、新風書房発行の「孫たちへの証言集」(戦争体験)に収録されています〕



レイテ湾 (インターネットから収録)

信仰雑感(二)

首 藤 正(前田)

(一) のぞき見

青年時代、牧師館に頻りに推しかけて、先生の素の御姿に身近に接して不思議でならぬことが、ひとつあった。それは何かといえば、心から愉快そうに笑い声を上げられる先生の明るさを、その頃、目を凝らして読んでいた聖書の何処にも見出せないことだった。

先生のような笑い方をする人物は、どうひいき目に見たつて羨にしたくともいないわ、と聖書の登場人物について見極め、いったい全体、この笑いの見当たらない聖書のどこから先生はあんな心からの笑いを汲み出しておられるのかと、全く腑に落ちなかつたのである。その意味でも、聖書は私にとって不可解な「封じられた書」であつた。その封印が解かれて、どうにかこうにか内側が伺えるようになるまでに、何年も何年もかかつた。いや、正直言つて、ほとんど一生かかつた。

今は二世先生の御笑いになるところで、半分くらいはつら

れて笑えるようになり、勘違いは多少あるとしても、少しくらいは近づいたかもしれない。

(二) 通底

歎異抄には、「たとい、師に騙されて地獄に墮ちようとも、念仏一筋で行く」という親鸞の賭けにも似た全身投射の姿勢が伝えられているが、「親鸞は弟子を持たず」という発言の裏に、人はいかにもあれ、私はこの人について行くという、「汝は我に従え」に呼応する純一さが見えるのである。福音と無関係の日本の中世で、この姿勢のあつた事に、今さら驚く。

聖書一卷を奉戴して、もしこの通りにならないで窮死したなら、その時はこの私が反証となると肚(はら)をくくつて乗り出された故利三郎師の証しに、今この私の生きていること自体が聖書の確かさの証明だと、繰り返されて止まなかつたのを思い出す。

父の信仰は、すぐれて仏教的(親鸞的?)だったとの和義先生の回顧談は、あるいはこの一事を指すのかも。

(三) 立場

きぎに聞こえることを恐れて、なかなか口に出さないが、人から評価された時、心中、みんなイエス様のいさおしと、

崇めを込めて言うのである。御子がご自分の命をもって買ひ取られたのであるから、私のものなんてひとつもない。何もかもイエス様のものなんだと認めて、それもこれもイエス様のためであるし、あらねばならないと自分に言い聞かせ、「主よ、御旨のよしとされるままに」と、主に心を向けるよう心がけるのである。

昔、よく牧師館に推参していた頃、何かと言えば、「お恵みで」を連発される牧師先生に違和感を覚え、普通なら「おかげさまで」というところなんだがなあと、胸の内では「おかげさまで」とおかげとお恵みとは、大違いだったのである。栄光を神様に帰す謙りと、感謝の表現を積極的になさっていた先生は、身をもって範を示されていたのであった。

「主にあつて」。この一言の意味は深い。

(四) 遁走

バプテスマと聞くと、苦い思い出がある。

故利三郎先生がある時、私におっしゃった、「そろそろあなたにバプテスマを授けてもよいと思っていた矢先に、あなたは逃げてしまった」と。その通りであった。

二十代後半、ありていに言えば、求道に行き詰まり、固い壁を前にして四苦八苦の挙句、私の取った道は転進であった。

つまり、これなら自分にもよく分かると思えた教えを説く、よその教会へ走った。かくして、「荒野の四十年」が始まり、放浪に次ぐ放浪、道草が食糧の旅路を奄奄(えんえん)と辿ったのである。

聖書には、耳の痛くなる言葉が沢山ある。そのひとつは、「最後まで耐え忍ぶ者は救われるべし」である。これを聞くと、「ヨルダンを前にお前は逃げた、逃げた」との声が聞こえてくるのである。もうこら辺で祈りを聞いてやろうと思う矢先に、よそへ飛んで行ってしまおう祈り手に、自分が擬されて我慢と信頼の足りない我が身が、つくづく情けなくなるのである。

(五) 名刺雑感

昔、利三郎先生に聞いたことがある。先生の驚きの御感想であった。

お口で名乗られても、それまでどうつてことのなかつた人々の反応が、一枚の名刺を差し出すことで打って変わったように丁寧になったので、その威力を見直されたと同時に、一種の莫迦ばかしさを覚えられた風情だった。

名刺の肩書には、多分「日本基督教団牧師」とあったのだ。活字の「牧師」が、人々に認識を与えること驚くばか

りなのである。社会的・習慣的に通用する証明の機能を果たすからこそ、人々は名刺を常用し、名刺交換も行われ、自己存在確認の期待を持つのであろう(もつとも、連絡の便を図る目的は否定しないが)。中には、つむじ曲がりを起こして、肩書抜きで姓名だけの名刺を出す人がなくはない。そんなくないなら、いつそ己の人格そのものを名刺に代用させた方が、潔いというものであろう。

半分は、自信なき人の便利具と言えなくもなさそうだ。

(六) THE LONG JOURNEY (長旅)

聖書を読み始めた当初から、疑問があった。なぜ、気に入られたアベルを、気に入らなかつたカインが襲いかかつて殺すのを、手をこまねいて神様は見過しておられたのか。

人間が人間に対して働く不正を事前に食い止めることをなさらず、事が終わるまで放置されて、その上で裁かれることで、人に有無を言わせない至上権威者たることを現わしておられるのか。その隔絶性に親しみどころか、恐れを覚えて「神は愛なり」という教会前の標語に、腰の引ける一種の疑念の目を向けていたのだった。それに加えて、仏教についての知識が災いして、「愛とは執着なり」という原義が加わり、聖書の説く救済への長い道程を辿るのに息切れがして、とても残

酷な奴隷への見せしめ刑たる十字架まで行けそうにない感じだった。

事実、道草、迂回、放棄を含めて、半世紀を要したのだった。長い、長い旅路だった。

(七) URAウラー (万歳)

因果な性(さが)だが、私は人を見ると、顔の向こう側で、本当は何を考えているのだろうかと考えあぐねることが多い。

口で何と言おうと、口とは裏腹に、口では言えない別の思いを巡らしているに違いないが、まずは知るべくもない胸の内側を憶測して、無力感と虚脱感を覚えるのである。

かと言って、今さら人の心底を洗いざらい知り尽くしたいとも思わない。

ただでさえ、人の裏と表の二重性に抱く不信で絶望にまで押しやられるであろう可能性に比べれば、まだしも想像の域に留まっている方が、救いがあるとも思えるからである。

自分自身の持つ心の二重性に照らして、言葉の片面性を思うと、自分や人へのどうしようもない不信感が心に巣食うのである。この根強い人間不信が長い間、私を悩ましてきた。

ひいては、神様との直の関係入りへの障害ともなった。つま

り、人の言葉がその額面通りに信じられないように、神様のお言葉も素直に文字通りに信じられない心の傾きから、なかなか抜けられなかった。

しかるに、ともかくありのままを披歴して、神様に訴えよという勧めに半信半疑で従って祈ってみた結果の応答もまた、打てば響くようなものでは決してなかった。しかも、疑いながら祈り求めるのは二心であつて、そのような者が何かを与えられなどと思うべきでないというヤコブの指摘は、私の期待を打ち砕くのに十分だった。

次にやってみたのは、かの癩癩持ちの息子の父親の哀訴の「われ信ず。信なき我を憐れみ給え」という見本だった。ところが、のっけの「われ信ず」に引つかかつてしまい、自分ごときは「疑ってかかる信なき我を助け給え」が正直なところではないかと思えた。これは全くに、信じる「幼児」以前の、いわば未生のバタ狂いのようなものであるうか。

科学者のエッセイを読むと、二言目には「何でも鵜呑みにするな。まずは徹底的に疑え」と言っているのが多い。これなど対象によりけりではあるうが、心理的には他の分野についても足の引つ張りとなりかねないのである。

昔、利三郎先生から「だから、聞く事柄に注意せよと、イエス様もおっしゃってますね」と、ことさらに言われたこと

があつた。何気なく聞いたことが深く突き刺さる刺となつて、とんだブレーキ役を演ずることがあるからだつた。

一般的に、科学は再現性のある事柄を取り扱う。そこに法則の存在が認められる類いのものという定義を読んだことがある。これなど、神様のお言葉に従うと約束の結果が必ず伴うという意味では、十分に再現性が保証されていると言える。科学専攻の利三郎先生の科学者氣質が、信仰に伴う報いの反復体験で、充足されたと見ることもできるのである。

ともあれ、顧みると紆余曲折は嫌というほどあつたが、「信なき私をも助けてくださった」という事実は、長いスパンを通せば、疑いを容れないものとなつた。

聖書を何度も通読しているうちに、普通、人間なら絶対明かさな手の内をいうか、奥底の本心・本音を包み隠さず、神様は人に告げ給うて、二心のないところを保証するために、事もあろうに、独り子というかけがえのない実物を提供してくださつてまで確実を期し給うた。これ以上すること、できることがないほどまでに、誠意の限りを披歴くださったという事が自明となつた。

信じるという事は、相手の人格を全面肯定、受容することの意味する。神様のお言葉を信ずることは、神様を全面的に受け入れることに他ならない。

言行一致の極致であられる神様を信ずる時、創造者を信認することとなり、この方のお造りになった全てのものをも容認することに繋がるのである。許容する心は、平安に連なる道に導かれていかざるを得ない。

長い間、人間を含む万物に対して閉鎖的であった私は、ようやく和解・解放の心境に辿り着いた気がする。まさにUR A(ウラー)である。

(八) うらやまし

クリスチャンは、イエス様の花嫁となるべき婚約者に例えられている。例えとは言っても、酷似の立場はこれ以上にはないから、この形容を引き合いにしたに違いない。男女の違いを超えて、ひつくるめて、花嫁予定者と自覚せよと呼びかけられているとすれば、女性は同姓だからすんなり納得できるとしても、逆立ちしても花嫁の身分になれるわけもなく、想像もリアルにはできぬ男性族としては、なにがし一種、途方に暮れるのである。

どう転んでもなれない者になってみせる実際の例としては、歌舞伎の女形があるが、これなどは演じて見せる芸にすぎない。

一般的通念のつもりで福音書は、花嫁の理想を前提にこの

言葉を掲げたのであろうが、実際の心持ちや心掛けとするに当たって、やはりためらいがあり、男族としては例の「総論賛成、各論反対」の後半分に似た及び腰とついなりそうになって、その点、ストレートで行ける婦人が羨ましいのである。

(九) 変遷

聖書の読み始め、合点のいかぬことがあった。

神は、似姿の人間に「善悪を知る木の実を取って食べたらいかん。きつと死ぬ」と仰せられたのに、禁を犯して食ってしまったアダム夫婦を、なぜ丸ごとお言葉通り死なしめて、土に還してしまわなかったのだろうか、ということだった。

そうしていたら、罪の因子を受け継いだ人間が増えまくって、どうしようもなくなり、洪水で一掃することもなく、遂にはえりにもえって、おのがひとり子を身代りに贖罪の犠牲に供することもなくて済んだはずじゃないか。なぜ刑罰を一ランク落として、樂園追放で済ませたことで、禍根を後に残し、挙句、神様自らが乗り出して、しようもない人間どもの汚れまくった「尻拭い」をなさるような破目を、自らお許しになったのか。まるで、死刑相当者を無期懲役に減刑し、さらに服役の途中で釈放処分にするような形だと感じてしまったのである。

この滅刑傾向は、選民のユダヤ民族のお取扱いにも後を引いているし、引いては、新約の信者にも及んでいるようで、勘違いの余地が生まれ、極めて「ヤバイ」ではあるまいか。寛容から来る忍耐を侮って、あるいは甘えて、取り返しのつかない最後の所で、「一人は取り去られ、一人は取り残される」という厳粛な決定が下されて、永久に閉ざされるといふ、有無を言わせぬ結末。それまでに随分と持つて回った手間をおかけになるものだと、その労苦をいとわぬお心遣いには、生意気を承知の上で、まさに脱帽するほかない。

人間なら、さっさと作り損ないは打っちゃって、新しく作り直すところなのに、神様のなさることは途方もない無謀そのものというもの、と言いたいところ。

なぜそうなさったのかという疑問に対しては、唯一「愛」という答えが用意されているだけで、人間の可能性を超えるその無償性の証拠に、「十字架」が樹立されておるのを見るし、生命性の保証に、復活の提示があったということは信ずるほかはない。

(十) アダム

高校生のころ読んだ随筆に、本当の友達の間には「SECOND THOUGHT(セカンド ソート)」はないものだという文句があっ

た。文字どおりには二番目の考えだが、卑近な言い方で言えば、本音のことであろう。俗にいう建前と本音の、本音の部分、本音のこと。口には出さぬ心底というものは、なかなか口には出しづらく、事実、めったに出ないものと、相場が決まっている。

新約聖書にも、イエス様を食事に招いたパリサイ人が、胸中に抱くイエス様批判の考えを、掌を刺すがごとくイエス様に見抜かれて、グウの音も出ぬまでに論される場面が出てくる。とつくにお見通しだったのである。

すると、信者は心に抱く思いを主に向かって披歴しようがしまいが、すっかり知られているわけだから、建前は何の役にも立たず、本音一本でいくことにこしたことはないことになる。つまり、真実の親友に対する如く、ありのままの交わりの道しかあり様がない。

この事が、実を言うと、それまで長いこと胸底に巣くっていた人間不信の泥沼から足を洗えるきっかけとなった。これを言えば、くちばしの青い未熟者のたわ言のようだけれども、人の言葉を額面通りに受け取るには、余りにも口に出さぬ本音の部分との食い違いがありすぎて、実際本当のところはどうなんだろうかと推し量るのに疲れて、だんだん人間嫌いが深まって、人との接触に後ろ向きになり、ほとんど世捨て人

同様になつて来た観があつたのである。

私は鈍いせい、遠まわしに言われると何の事だか分らないで、取り返しの付かぬ時点になつてはじめて何を言われたのかが分かり、齒がゆい思いをしたことが数知れない。なぜズバリ核心を言つてくれなかつたのかと、恨めしいのである。角が立つも何も、本心が伝わらなければ、せつかくの心遣いも無駄というものではないかと、口惜しいのである。

周囲の者にはつきり言つてくれと、折に触れて要望しはするが、残念ながら今いち反応は弱いままのようだ。

イエス様には、建前も本音もない。オール本音である。二心は爪の垢ほどもない。

お言葉は額面通りお心である、ということがだんだん分かつてくるといふか、信頼を置けるようになると、極端に言う、人の有りようの不完全さには、あまりむきにならなくなつた。イエス様にさえしつかりと信頼しとけば、後はどうにかなる、と人間の隣人に対して寛容の心が芽生えて、その分不信任が薄らぎ、人間嫌いも薄紙を剥がすように取れて来たのである。

心に余裕が生まれると、妙なもので視点が複数を帯び、全然別の見方もでき、すると、おのずといるんな事におかしみが感じられるようになり、俄然、人の世が面白く見えだした。

パウロさんの言葉に、「はじめのアダム」と「おわりのアダム」というのがあるが、いささか牽強付会(けんきょうふかい※)ながら、まさにはじめのアダムは悲しみのアダムであり、おわりのアダムは悦びのアダムであつた、という事は体験を通して、幾分かなりと分かつてきた気がするのである。

※「牽強付会」 自分の都合のよいように、無理に理屈をつけること。こじつけ。

(十一) 桃源郷を越えて

人生をやり直してみたいと思う人がいたら、よほど酔狂な人である。私は一度で沢山である。二度と、あんな自分自身を持って余すような苦渋に満ちた時間を繰り返すのは、ご免である。たといまことの救いに入るのに、それしかない手立てだったとしても、嫌である。差配者が人間だったら、断固拒否したい。造り主さんが相手だから、否も応もなく、その道筋を通らされて通つて来たのに、何の文句もないところである。

世に、一期一会ということがある。一回こっきりの事だから私は通り、いや通らされ、通り抜けて、ようやく明るみに出た。逆戻りは嫌である。幸い、原則逆戻り不可ときている。

中国に桃花源記というのがあつた。一漁夫が道に迷い、桃

林を辿るうち、世にも稀な平和な仙境に出たが、再訪できなかったという話。

豁然(かつぜん)として開朗し、桃源郷に出たという形容が妙に心に残っていたが、道があるのやらないのやら、決めかねる谷川沿いの石ころだらけの登りを辿っているうち、突然視界が開けて、目の前に平和境が拡がり、空気も一変し、甦った足取りも軽く村里へ入って行く。その武陵の一漁夫の心境に、自分が重なるのを覚えるのである。

夢よ、もう一度は、なしである。私はその桃源郷の先へ行きたい。

(十二) ぎやくてん

「われ思う。ゆえにわれ在り」

は、デカルトが言い出した哲学の革命的大命題だった。人間存在の根拠を思考に置いたものである。

これを逆転させて、「われ在り、ゆえにわれ思う」としたら、どうなるか。

私という者が生きているからこそ、考えることもできるし、死んでしまえば、考えようたつてそれは無理な相談だ、というわけだ。哲学にはなるまいが、常識ではあろう。生きてあればこそ、苦勞もある。悲しむ事も、泣く事も、わめく事も

できる。この世に存在せしめられているからこそ、病氣もするし、老けもするし、とどのつまり死にも会える。生存という大前提がなければ、何事も起きないし、起こりようもない。「生老病死」を人生の四大苦と見る考えがインドから生まれたが、創造主を知るための天与の材料と取れば、様相は一変するのではあるまいか。

(十三) 単純さ

不信ということが、何と言つても癌である。肉体を蝕む癌も恐ろしいが、精神を害う不信というこの厄介な代物は、見方によつては、肉体のそれ以上に人を不幸に突き落とす。人と人との間に横たわる不信が、人間社会にどれほど複雑にしているか計り知れない。第一、戦争そのものが、不信の産物で、その手段たる武器も、結局は不信が作り上げたもので、もし不信という化け物が横行していなかったら、武器もなければ、戦争もなし。世の中は、それこそ風の海のごとく平和に蔽われるに違いない。

そもそも人の不幸はどこから来たか。創造主への不信に端を発した。創造主のお言葉を信じないから、命令違反をやらかす。違反者は圏外へ出されるのは、スポーツの試合で退場処分される例にも明らか。

創造神が最優先扱い、兼唯一の条件となさったのが、ご自分への信頼＝信仰なのであるのは理の当然であつたと、今さら言うのもおかしいくらいなものであろうか。

(十四) もぐら(のつぶやき)

私は時代遅れ、生まれてこの方、時流に追いついたことがなかった。いつも乗り損ね、口に指をくわえて、やり過ぎしていた。子供の頃、軍事訓練におたついてぶっ飛ばされ、武道には及び腰で、軍国主義の海にアップアップし通しだった。

戦争が終わって、世を挙げて民主主義の本場のアメリカ流が大はやりで、職場の話題はいの一番も二番もプロ野球。タクシーに乗っても避けられず、閉口してしまった。株式投資が流行病の如く身边を席卷した時も、ひたすら首をすっこめていたし、壮年期には猫も杓子も、何かと言えば「クラブを握らぬ者は、人にあらず」ていの川上風を吹かすゴルフ仲間連中の豪毅面をよそに見て過した。

二十世紀末から襲来して、ますます吹き募ってやまない「IT」情報技術旋風には、どなたもこなたも見事にのっかかって、無縁な者には、今や生くる資格なしの趣が濃い、私は土竜(もぐら)一筋で行くつもり。

何を考え、何を見ているのか。

尼 田 隆 己(前田)

これは去年の話ですが、カナダに住んでいらつしやる一人の尊敬する方がいます。その方(L姉とします)から七月の初めのころに一通のEメールが届きました。それには、「緊急のお願いがあります」と。

内容は「私の心の友Oさんが病気で大変な状態になっています。どうぞ、神様が奇跡でもって助けてくださいますようにお祈りください」というものでありました。L姉とその病気になつている姉妹との親しい交わり、L姉は信仰をもつて、すぐその友も神様に導かれるようにと五十年以上にわたつて篤き祈りをして、お聞きしていました。それは、それは神様を信じて本当に根気よくお祈りをなさつていらつしやいました。

そのOさんの知らせを聞いて、私も驚いてすぐに祈つて与えられた御言葉、「人にはできないが、神にはできる。神は何でもできるからである」(マルコ十・二七)を送りました。

そのようなやり取りを何度か繰り返していました。ちょう

ど、前田教会にOさんの近所に住んでおられる方がいましたので、メールの内容をお話して、それとなくOさんの様子を見ていただいていたのですが、最初のメールが来てから二週間ほどして、「あの方は召されなされたよ」とその方が知らせてくださいました。私の心は真つ白になり、おろおろしてしまいました。何と言ってL姉をお慰めしたらと、聖書の御言葉を探し回りました。もちろんお祈りもしましたけれども、何とかしてピタツとくる御言葉はないものかと探し回りました。でも、どんな御言葉をもつても、慰めにはなりそうもありませんでした。

そうこうしているうちに、L姉からメールが届きました。それには「Oさんは、O日に天の御国にお帰りになりました。これが私どもの神様へのお祈りのお答えでした。お祈りを有難うございました。謹んで…」とありました。私は頭をガーンとなぐられたようでした。神様を信じて実に潔(いさぎよ)く、また少しも揺らくことのない言葉でした。「神様だ。神様がなさったんだから、神様のお答えなんだから」と、彼女は神様に目を留めている。そのとき私もその信仰に導かれて、ようやく安らかな心を取り戻すことができました。

いま考えると、私のそのときの祈りの姿勢は、彼女の病気が癒されますように、奇跡が行われますように、癒されなけ

れば嫌だと、自分の考えを押し付けて祈っていたと思います。しかも聖書を手に取りながら、神様の御言葉を読みながら、神様に目がいかなかった、神様を見ていなかった。このように信仰の基本が全く身に付いていないというか、これで神様を信じているのかと、恐ろしい自分の姿を見せつけられました。

このように問題や事態にあたったとき、アツという間に、もろくも信仰が崩れていく自分の姿を見せつけられて、また一つ神様に対する態度が整えられたと、感謝にたえません。またこのように、主にある兄弟姉妹との交わりのなかで信仰が高められるのも、有難いことだと感謝いたしております。



イスラエル・聖書の世界を訪ねて

正 野 眞 宏 (前田)

聖地旅行については、「ぶどうの木」第三四号に要点だけを掲載しましたが、せっかくの貴重な経験ですから、今回紙面を頂いて、もう少し詳しく報告することにします。

前回の内容と一部重複する所がありますが、全体把握のため、お許しいただきたいと思います。

一 はじめに

これまで何回か海外旅行をさせていただいたが、心の中では、いつかはイスラエルへ行ってみたいという思いがあった。しかし、現在のパレスチナ情勢を見るとまだ不安定な状況にあり、現にどの旅行会社もツアーを組んでいない。これではとても無理だろうと、半ば諦めていたところ、思わぬ形で実現することになった。

岡山の弟から、日本イエス・キリスト教団の創立六十周年記念行事で聖地旅行の計画があるので、一緒に行かないかと誘いを受けたのである。

これまでの一般の人ではなく、信仰を同じくするクリスチ

ヤン(同教団はバックストン先生の信仰を受け継ぎ、金生先生ご夫妻が出られた関西聖書神学校を経営している)だけのツアーであり、主にある交わりが得られるだけでなく、現地ガイドがエルサレム在住の日本人女性牧師柿内ルツさん(彼女はこの地で聖書の歴史的事実を通して伝道する使命を持っておられる)で、聖書中心のものになるという、願ったり叶ったりのツアーである。私は一も二もなく快諾した。

二 イスラエルへ

教団で募集をかけたところ予想以上の応募があり、結局二班に分かれて行くことになった。弟夫婦と私達は第一班に入った(第二班は十一月になるという)。

第一班の同行者は添乗員(彼もクリスチヤン)を除いて三五名、日程は平成二十年四月七日から十八日までの十二日間である。イスラエルまでの経路は、成田からパリまで行き(十二時間)、そこから引き返す形でテルアビブ(ベングリオン国際空港)まで行く(五時間)ものである。

ここで少しイスラエルの歴史について触れてみたい。

イスラエルは紀元七十年にローマに滅ぼされて以来(この時、イエス様の預言のとおり神殿も焼き払われた)、国を失って各地に散らされ、苦難の歴史を辿る。ローマ滅亡後は、オ

スマントルコなどのイスラム教徒に支配され、一時期十字軍が奪還したがそれも長くは続かず、イスラム支配が長く続く。

一八〇〇年代中頃からヨーロッパ在住のユダヤ人を中心にシオニズム運動が始まり、イギリス統治もあって一部の人達が入植し、パレスチナ人から土地を買い、それも役に立たない湿地帯を苦勞して開墾し、土壤改良を行い、乾燥地帯の裸の山には木を植えて緑を増やし、今日の穀倉地帯を作ったという。各国に寄留していたユダヤ人はその差別政策によって土地を持つことが許されなかった。それだけに、先祖の地で自分の土地を持つことが夢だったのである。そして、一層の盛り上がりから建国の運動がなされ、国連の承認を得て(一時期は南アメリカでの建国の話があったという)、建国しようとしたが、アラブ諸国の反撃に会い、イギリスは手を引いてしまった。そこでユダヤ人が独力で、数倍の兵力のアラブ諸国と戦うことになった。第一次中東戦争である。多くはたちまち潰されるだろうと予測されたが、短期間でユダヤが勝利し、領土を得、一九四八年に建国した(今年六十周年を迎える)。しかし、この事によって多くのパレスチナ難民を生み出し、今日の紛争の元となった。

現在は国連によってパレスチナとの領土分割がなされ、一応決着は付いているが、一部の過激派によって、テロが続い

ている。

現在のイスラエルの領土は、丁度九州を縦に割った形と広さで、縦は約四百キロ、横幅は五、六十キロ程度の縦長の国で、緯度もほぼ同じである。北にはレバノンがあり、東側はシリアとヨルダン、南にはエジプトと接している。アラブ諸国に取り囲まれ、薄っぺらの国でいつ何処から攻めて来られても防ぎようがない、見るからに危うい国である。それだけに、この国の最大課題は防衛問題である。

そこに七百万人が住み、八割がユダヤ教で、十四%のイスラム教徒がおり、クリスチャンは3%に過ぎない。ロシアから帰還したユダヤ人は無神論者が多いという。

現在のイスラエルは豊かな国である(それに比較してパレスチナは一見して貧しく、イスラエルとの差は歴然としていた)。主な産業は、ダイヤ研磨(世界の大部分を占めていること)、ハイテク(パソコンのほとんどにマークが入っているインテルが有名)、聖地旅行(キリスト教とイスラム教の聖地となっている)等の観光事業、そして農業などである。つくづくユダヤ人の優秀さを思う。これも神の祝福である。

三 エラの谷

深夜にテルアビブに到着し、ホテルに着いたが、ほとんど

寝る暇もなく、しかし元気に現地第一日を迎える。



ダビデがゴリアテと戦ったエラの谷（サウル軍側）

最初の訪問地は、エラの谷であった。途中で、アヤロンの谷の近くを通った。ここはヨシユアが敵と戦った時、神に祈って一日陽が沈まなかった所である（民数記十・十三）。また

ペリシテ人に奪われた契約の箱が最後に返されたベテシメシ（サムエル記上六・十四）がすぐ近くだと言う。柿内さんから次々と聖書の地名が出て来るので、ワクワクする。

エラの谷はダビデがペリシテのゴリアテと戦って倒した所である。そこに立った時、柿内さんがサムエル記上十七章三一節以下を朗読したので、臨場感いっぱいになった。私は今、ダビデと同じ場所に立っているのである。

この当時、両者の戦い方が違ったという。イスラエル人は集団で戦うのに対し、ペリシテ人は代表を出して一対一で戦わせ、負ければ潔く退却するというものである。この時の戦いが硬直化して長引いてきたので、ペリシテ側がゴリアテを出して決着をつけようとした。しかし、イスラエル側はそういう戦いに慣れていない。それに当時の武器はイスラエルが青銅であるのに対し、ペリシテは鉄製であるため、民は恐れをなして誰一人名乗り出る者がいなかったため、たまたま居合わせたダビデが信仰に立って戦うことになった。

この時、彼は滑らかな石五個を取ったとある。なぜ五個だったかと柿内さんから問われて、誰も回答できなかったが、その訳は、相手はペリシテだけではなく、五人の王と戦っていたので、たとえゴリアテを倒しても、後の四人の王が代表を送り出すかもしれない、そのためであったとの事。つまり、

ダビデは石投げ一発でゴリアテを倒す信仰を持っていたということである。何とすごい信仰ではないか。石投げは二十メートルほど飛ぶそうである。

エラの谷は思ったよりも広いと思った。聞けば昔の地面はこれより二十メートル下で、川も流れていたとの事である。

四 ベエルシバへ

ベエルシバはアブラハムがアビメレク王と井戸の事で争った所で(創世記二二・二五)、その名も「ベエル(井戸)」「シエバ(誓い)」から来ている。イサクも老後、この地に住んだ(創世記四六・一)。ここは古代から異教的聖所(そのレプリカが残されている)があり、預言者アモスがこれを非難し(アモス書五・五)、ヒゼキヤはこれを破壊し(歴代志下三一・一)、また聖書に良く出て来る高き所もヨシヤ王が破壊している(歴代志下二三・八)。現在、発掘が進んでいるが、ダビデ時代(三千年前)のものである(イサク時代の遺跡はその下に眠っているが、井戸は今も残って水も湧いている。イスラエルの地層には水を含んだ石灰岩があるため、井戸が掘れるという)。

ベエルシバから南は砂漠地帯となっており、イスラエルの領土は「ダンからベエルシバまで」となっていた(サムエル記上三・二十)。



ベエルシバの遺跡(門の部分)

ここで柿内さんが面白い事を教えてくれた。横の写真は町の門であるが(門は町の防衛上重要な意味を持つ)、門への侵入路は鍵型になっていて、右手から入って左に曲がり、そこからまた右に曲がるように設計されている。それは敵が槍や

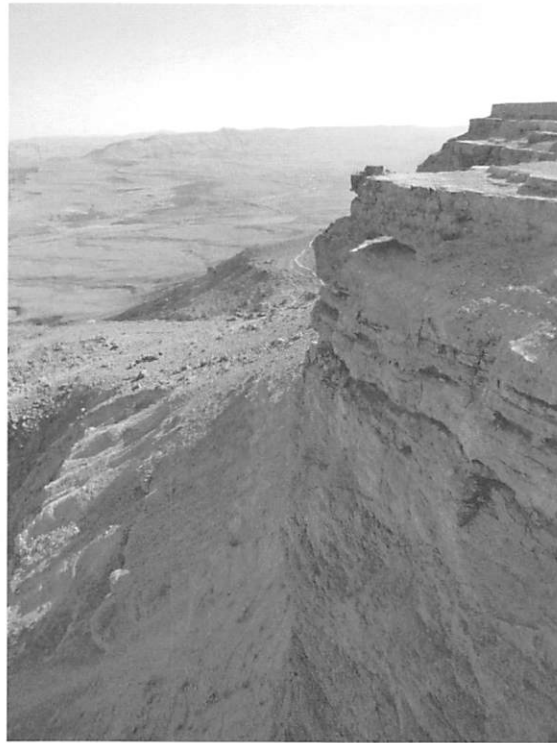
弓を持って侵入して来た時に、武器を持った右手を使いにくくするためである。また右腕が使えなければ弱点ともなる(防具は左手であり、右手からの攻撃には防ぎにくい)。そこを城壁から攻撃するのだという。ダビデが「主がわたしの右にいますゆえ、私は動かされることがない」(詩篇十六・八)と詠ったのは、右肩が弱点となるので、その盾となつてくださるという意味だと教えてくれた。

また城壁の門は、防衛的役割だけでなく、すぐ横に部屋があつて町の長老達が座り、出入りする人々をチエックした(町民は全部分かるので、不審者はすぐ判明した)。またそこが一番賑わう所で行政の窓口のようになっており、いろいろな相談がなされたとのことである。ルツ記に出てくる。

五 ネゲブ砂漠

ベエルシバを南下してネゲブ砂漠に入ると、景色は一変する。砂漠とは言つても、ここはサハラ砂漠のような砂ではなく、ゴツゴツした岩の荒野で、山と言うより氷河が抉り取つたような深い谷が続く(シナイ半島では高い岩山である)。この日の宿泊地ミツペラモンはネゲブ砂漠のど真ん中にあるが、ホテルから歩いて行ける距離に、月面を思わせる大クレータ―があつた(写真参照)。いずれにしても、イスラエルの民が

こういう所を徒歩で行つたとは考えられないほどである。



ミツペラモンから四十キロほど西にカデシバルネアがある。ベエルシバまで直線距離で七、八十キロしかない、文字通り目と鼻の先まで来ておりながら、不信仰のゆえに引き返し、四十年の荒野の生活を強いられ死に絶えた、運命の分かれ目となつた地である。

彼らの不信仰の多くは眩きである。しかし、ここに入つて分かつたことは(シナイ半島でも同じであるが)、見渡す限りの焼けた石の荒野で、水も食物も得られず、緑とてなく(羊を

どうやって養ったのだろう)、何の慰めも希望も見出せない、ただ神により頼むほか道がない厳しい環境に置かれて、果たして私は信仰を持ち続けることができるだろうか、呟きが出て当然ではないか……イスラエルの民の気持が理解できるような気がした。そして、神は何と厳しい御方だろうか。

柿内さんが説明してくれた。「神は、夜は火の柱、昼は雲の柱をもって導かれた」、それは単に道しるべとなっただけではない。昼の暑さに耐えられるように、雲をもって日陰を作ってください。確かに春のこの時季でも日差しは肌を刺すように強くて(水の補給がなければ生きられない)大変だと思いの、日陰に入ると空気が乾燥しているので嘘のように涼しいのだ。温度差は十度くらいあるのではないかと思つた。

一方、夜は一転して温度が下がって寒くなる。神は火の柱を立てて暖めてくださった。それだけではない。荒野には狼やライオンなどの猛禽類が住んでおり、またサソリもいる。民数記には、火の蛇で多くの民が死んだ記事があるが、マムシかもしれない。神はそれらが近づかないように火の柱を立てられたのだ。ある所では寝ずの番をされたとある。ここは正に、生きるか死ぬかの世界である。神の守りがなければ、とても一五〇万からの民族の大移動は不可能である。

私は説明を聞きながら、神の懇ろな御愛を思わされた。神

はイスラエルの民がカナンの地に入るための信仰を整えようとして荒野の中に導かれたが、火の柱、雲の柱のほか、マナやウズラをもって養い、岩を割って水を与え、「この四十年の間、あなたの着物はすり切れず、あなたの足は、はれなかつた」(申命記八・四)、一切の必要と健康管理をしてくださった。正にモーセが言ったように、「わしとその巢のひなを呼び起し、その羽をひろげて彼らをのせ、そのつばさの上にこれを負うように、主はただひとりで彼を導かれて」(申命記三二・十一―十二)のである。今日は砂嵐がなくて感謝ですとの言葉に、その思いを強くした。

六 ティムナ銅山と原寸大の幕屋

現地三日目、この日は国境を渡ってシナイ半島(エジプト)に向う。ネゲブ砂漠を南下している途中で、柿内さんが左側にアロンが召されたホル山が見えますと案内したので、山向うにひととき高くそびえるホル山がかすかに見えた。その麓に世界遺産のペトラ(ヨルダン領)があるそうである。

バスはしばらく進んで、ティムナの銅山に着いた。モーセが銅を掘ることができるといった所である。ここはパロ王の時から始まり、ソロモン時代に多く開発され、二千もの坑口が発見されているそうだ。



モーセ時代の原寸大幕屋

すぐ近くに、ソロモンの宮殿の柱に似ているからと名づけられたソロモンの柱と言われる奇岩群がある。ここに立つと、世界にはこんなすごいものがあるのだと思わざるを得ない。そこからまた、聖書どおりの寸法で作られた幕屋があるとこのことで行ってみたが、思ったより小さいので驚いた。

中庭には燔祭を殺して捧げる場所と洗盤があり、幕屋の中の聖所には正装したアロン(像)がおり、祭壇と燭台、それに種入れぬパンが備えられていた。思ったより簡素だった。

聖所の奥の至聖所には契約の箱が安置され、中には契約の石とマナと芽を出したアロンの杖が入れてあった。勿論レプリカである。

幕屋は東向きに建てられ、入口は一箇所だけである。イエス様が「わたしは門である(ヨハネ十・九)と言われたのはこの事で、イエス様を通つてのみ救われるのである。聖書に書かれているかどうか分からないが、燔祭に捧げられた二匹の羊の内の一匹は、逃されるとの事である。

プロテスタントのユダヤ人女性がいろいろ説明してくれたが、同じ信仰の話だったので嬉しかった。興味深かったのは、イエス様が息を引き取られた時に聖所と至聖所を隔てた幕が真つ二つに裂けた意味は、十字架によって罪が許され、至聖所に近づくことができるようになったこともあるが、ユダヤでは息子が死んだ時、父親は悲しみのあまり衣服を裂く習慣があり、父なる神が御子の死を悼んだことの表れでもあると聞かされ、十字架の犠牲の大きさを改めて思わされた。

そこを出発して南下して行くうちに、徐々に緑が増え、ナツメヤシの植林が見えてくる。聞けばここはまだ水がないの

で、水パイプを引いて給水しているのだという。

ここで柿内さんが、聖書にカナンの地を「乳と蜜の流れる地」と紹介されているが、乳とは羊や山羊の乳のことであり、蜜とは蜂蜜ではなく、ナツメヤシのことではないかと言われているとの事。それほどナツメヤシは甘いのである。

七 国境を渡ってシナイ半島へ

バスはイスラエルの最南端、エイラットに着いた。紅海(アカバ湾)に面した貿易港(ソロモンがインドや東南アジアとの貿易のために開港したとの事)である。現在も貿易港として重要な位置を占めている。日本車が数多く荷揚げされていた。

ここから国境を越えてエジプトのタバに入り、しばらく紅海沿いに走る。右側はそそり立つような岩山が迫り、左側は世界一澄んでいると言われる紅海(モーセ達が海の中を渡った紅海はシナイ半島の反対側)である。

対岸はサウジアラビアですとの案内に、そこはモーセがエジプトから逃げて住んだミデアンの地であることを思い出し、彼が羊を追っている内にシナイ(ホレブ)山まで行ったことに、こんな遠い所まで来たのかと、驚きと共に神の不思議な導きを思わざるを得なかった。現在でも、ベドウィンの人達がわずかな羊を飼っている姿が見えた。

バスは半島の内陸部に入り、いよいよ岩山が迫ってくる。こんな所をどうやって移動したのだろうかと思う。事実、イスラエルの民は海岸部を行っている時は水も食物もあつたから良かったが、山道に入って移動困難となり、水も食物も得られなくなつて文句を言い出したとか。それも納得である。バスは今日の目的地シナイ山麓の町、聖カテリーナに着いた。いよいよ明日早朝、シナイ(ホレブ)山に登ることになる。

八 シナイの山頂に立つ

朝二時にモーニングコールで起こされた。手早く身支度をして外に出たが、やはり寒い。登山口までバスで行く。シナイ山は標高約二六〇〇メートルで一五〇〇メートル地点から約一〇〇メートルを登ることになるが、高齢者も多く(私も?)、途中までラクダに乗ることになった。しかし、登山者が多く(まるで富士山登山のように数珠繋ぎである)、なかなかラクダに乗れない。一度上つて下山するラクダを途中で拾うことにして、登り出した。真っ暗闇である。懐中電灯を照らさなければ先が見えない。

かなり登つた所で順番が来てラクダに乗ることができた。ラクダは座ってくれるが、体が大きいので私の長い足でも股越せない。止む無く手と足を引っ張つてもらつて乗ること

ができた。ラクダが立ち上がる時が大変である。なにしろあの長い足で前後一方ずつ立ち上がるので、その傾き方は相当なものである。背中に立ててある杭をしっかりと握ってはいたが、予告なしに立たれて大方振り落とされそうになった。

乗ってみると思つた以上に目線が高く、最初は緊張して股をしつかりラクダの脇腹にこすり付けていたが、すぐに慣れて揺れるに身を任せ、乗馬ならぬ乗ラクダ、いやこれが本当の「ラクダ(楽だ)」なんてしやれが出るようになった。

上を見上げれば、満天の星がきらめく。この星をモーセも眺めたのだらうなと思うと、嬉しくなつた。

道も狭くなり、急な坂道となつた。わずかな星明りはあるが、辺りは暗闇である。この中をラクダは見えるかのように進む。下山するラクダとすれ違う時は、相手のラクダと強く押されるように接触する。反対側を見れば千尋の谷、いささかのスリルである。

一時間ほど乗って降ろされた。料金は途中から乗つても、十六ドル(一六〇〇円)であつた。ここが凡そ中間点。これから自分の足で登らなければならない。ところが、ここからラクダも行けない岩場である。事前にもう少し足を鍛えて置けばよかつたと後悔したが、八十一歳の女性も登っているのに、とにかく頑張るほかない。家内も元氣そうで何よりである。

歩き始めて約一時間半、漸く頂上に着いた。すでに多くの人がいて満員状態である。私達のツアーより少し下の方で韓国の人達が大声で賛美歌を歌い、その後熱烈な祈りが続いていた。他の所でも賛美が聞こえる。わが班も負けじ?と、聖



シナイ山の山頂と周りの山々

歌を歌い、祈りを捧げた。

歩く途中では汗をかくほどだったが、やはり寒さが厳しい。漸く東の空が明るくなって、日の出が近くなった。この時のために早起きをしてここまで来たのだ。しつかりと見届けたいとじつとその時を待ったが事前の案内では、最初は横に赤い線が広がり、それから日が出る、その時の光景は荘厳と言うほかないということだったので、我々は大いに期待していた、ところが山際にモヤがかかって、何事もなく太陽は顔を出してしまい、シヨ―は終わった。こんな事はあまりないということであるが、これも地球温暖化の影響かもしれない。

あたりの山々の写真を撮り、しばらくして下山することにした。帰りは来た緩やかな道を帰るか、それとも急だが距離が短い道を降りるかと案内のベドウィンの人が尋ねるので、高齢者は別として比較的若い？者はみな、急な道を選んだ。ところが、結果としてそれが失敗だった。予想以上に急な坂で、しかも岩場を跳ぶようにして行かなければならない。かなりの膝の負担となる。最後は膝が悲鳴を上げ、痛くて顔をゆがめながらの行進であった。

行きは暗くて何も分からなかったが、帰りは辺りが良く分かる。私は途中でモーセが燃ゆる柴に出会ったような場所はないかと探しながら歩いたが、何処にも見当たらなかった。

何しろ山頂付近は木一本生えていないのだ。中腹でイトスギが数本生えた平らな所があったが、柴の木はなかった。モーセは羊を連れていたので、見たのは山の下の方だったのかもしれない。(柴の木は形が逆三角形の背の低い木で、荒野を走るバスの中から度々見かけた)

もう一つ、モーセが神から十戒を受けた場所であるが、これも全く分からない。ただ感じたことは、シナイ山は人を寄せ付けない岩山で、神の権威を現しているということである。今は道が付いて我々でも登れるが、当時は道一つなく、険しい岩場をモーセは神から召されて、何度も往復した事を思うと、八十歳を超えた彼の健脚ぶりだけでは説明は付かない。しかも彼は四十日四十夜飲まず食わずで、十戒の重い石板を持って、この急な坂を下っていたのだ。

山を下って少し行った所に、平坦な広い場所があった。ここで民はモーセの帰りを待ったが待ち切れずに、アロンに金の子牛を作らせ、その周りで踊っていたのではないだろうか。私の想像は尽きることがない。

私は出来ればシナイ山の全景を撮りたいと思つてその機会を待ったが、駄目だった。シナイ山は連山なのだ。

九 死海(塩の海)へ

下山後、来た道を北上し、途中から右にそれて死海へ向う。死海は海拔マイナス四〇〇メートルの塩の海である。気圧が高いため塩の濃度が三八%と高く(塩が金平糖状に結晶していた)、浮力が強い。私も実体験したが、とにかく沈まない。それどころか、うつぶせになって泳ぐこともできない。お尻と足が海上に浮いてバタつかせることができないからだ。それどころか、背中が反り返ってしまい、身動きができない。もつぱら上向きになって、空を眺めるだけである。体の裏表を回転させるのがまた大変である。とにかく浮力が強くて、意のままにならないのだ。私は何とかできたが、皆さん苦労していた。世界にはこんな所もあるのだと思った。

ここの塩はいわゆる塩化ナトリウムではなく、塩化マグネシウムの塩である。従って苦く、食用にはならない。その代わり、海水が濃くてヌルヌルと言うか、肌にはスベスベする感じで、皮膚疾患などの薬用に効果があり、世界から湯治に来るそうである。

昔の死海はもつと南まで延びて広がったが、最近では地球温暖化の影響か、ヨルダン川から流れ込む水量が減り、死海の水も蒸発して水位が下がっているそうである。

対岸はヨルダン(昔のアンモン・モアブ)である。向こう岸

には、その昔ソドムとゴモラがあったが、今は水没している。各国の考古学者がヨルダン政府に発掘を申請しているが、宗教の違いをもつて許可しないとか。変な話だが、反対のイスラエル側にロトの妻が塩の柱になったという岩がある。岩の



死海の夜明け(ホテルから)

下には塩が岩になったものが散乱していた。

次の日、ユダヤがローマ軍に最後まで抵抗したというマサダの要塞へ行った。マサダはヘロデ王が死海のほとりの山の頂上に建設した要塞である。ヘロデは猜疑心が強く、長男と次男、さらに妻をも殺したとか。イエス様が生まれた時代に生まれた男子を皆殺しにしたのも、猜疑心と用心深さからである。また、もし外国から攻められたらという恐れから次々に要塞を造り、隠れるようにして要塞の中の宮殿に住んだりしたそうである。マサダの要塞が有名になったのは、ローマ軍に反乱を起こして結局は鎮圧され、最後の砦として六九七人がここに立てこもり、二万のローマ軍に包囲されたが、三年持ちこたえた。最後は水や食料も残したまま、壮絶な集団自決を図って全滅した。彼らは民族の誇りと信仰の自由のために戦ったと説明があった。ここにユダヤは滅び、国を失うことになる。紀元七十年の事である。この事は聖書には出てこないが、ユダヤ人の誇りになっていようである。

今はロープウェイで登ることができるが、要塞は遺跡からかなりの規模であったことがわかる。この高さには資材を運んで建設したヘロデ王の権力の大きさには驚くほかない。中にはローマ軍が攻撃に使った大きな石の弾丸も残されていた。

十 ダビデの滝(エンゲデの野)

マサダに程近い所にエンゲデの野があり、そこに滝があった、その名も「ダビデの滝」と言う。ダビデはこの滝の水を飲んだのであろう。今も水は枯れることなく流れ続けている



ダビデの滝からユダの荒野を望む

が、この奥の山々はユダの荒野である。つまり、ダビデがサウル王から追われて、放浪した地である。

ここからエルサレムまでは直線距離で二、三十キロの距離にある。親友ヨナタンとも度々会うことができたことが推測できる。ユダの荒野に立つことはできなかったが、ダビデがどんな困難な生活をしていたか、昼は灼熱の太陽、夜は寒さに凍え、加えてサウル王の追跡の恐怖、その期間は分からないが、イスラエルの民の荒野の四十年にも匹敵する神の試練であり、王として立てられる準備の時だったのだろう。この時があつたからこそ、イエス様の型としての生涯を全うすることができ、またこの時に作られたすばらしい詩篇が私達の心を揺さぶるので。そんな事に思いを馳せていた。

十一 死海文書のクムランへ

死海が一番北にあるのが、クムランである。ここを有名にしたのは、一九四七年に死海文書が発見されたことによる。紀元前十五年頃から紀元後五十年頃、ここにエステニヤ派(バプテスマ派とも言われる)の二、三百人の人達が禁欲主義の生活をした場所で、バプテスマのヨハネとも繋がりがあつた。「このヨハネは、らくだの毛ごろもを着物にし、腰に皮の帯をしめ、いなご」と野蜜とを食物としていた」(マタイ三・四)とあ

るのは、エステニヤ派の人達の生活ぶりを言っているのだろう。彼らはひたすら祈りと聖書の写本に励んでいたという。その住居跡や洞窟が発掘されて、彼らの生活ぶりが分かるようになったが、なぜ聖書の写本が二千年後に発見されたかと言うと、



イザヤ書の写本が発見された第四洞窟

それをすぐ後ろの山の洞窟に隠しておいたからである。羊を飼っていたベドウィンの少年が洞窟の中から壺を発見したのが始まりだったらしい。特にイザヤ書六六巻は、完全な形のまま残っていたという。その意義は、それまで聖書は後世の人が書き加えたものというのが通説になっていたのが、完全に覆ったことにある。「もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる」(黙示録二二・十八)とあるように、神は聖書をそのまま私達に伝えてくださったのである。

全部で一一九巻発見されたとかで、聖書注解書もあつたという(文書はエルサレムの死海文書館に保管されている)。

十二 エリコ

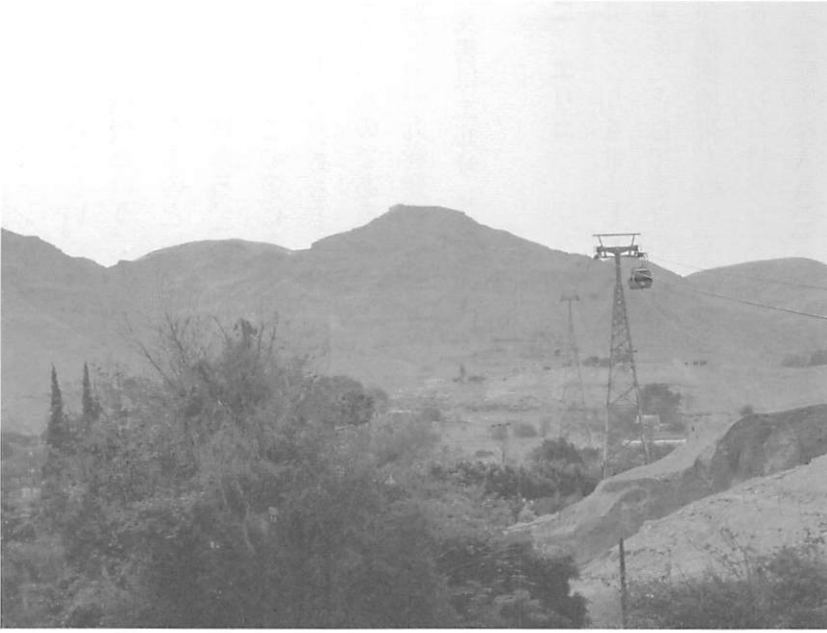
ヨルダン川を北上してエリコへ行く。ヨルダン川と言つても、見ることはできない。ヨルダンとの国境になつており、国連が緩衝地帯を置いて近づけないようになってゐるからだ。現在のエリコはパレスチナ領である。このため、ユダヤ人のバス運転手は入ることはできない。ユダヤ人が入ると、石を投げつけられるか、殺されるそうである。国境(銃を持った兵が警備していた)で、パレスチナのバスに乗り換える。ところがこのバス、イスラエルの最新で快適なバスとは違い、オ

ンポロでガタガタである。あまりの違いに、一同声も出ない風であった。途中でイスラエルの空爆に遭つた建物がそのまま晒されているのが見えた。戦乱の凄まじさを思う。また町に入ると、若者がやたらと目に付く。働く場がないのだろう。予断と偏見かもしれないが、イスラエルとは雰囲気まるで違うし、国力の差は歴然としているのだ。

ここで昼食をとる。何を食べさせてもらえるのかなと思つていたら、バイキングでけっこう種類も多く、味もよしい。果物も豊富である。少し見直した。

この店の名が面白い。「レストラン誘惑」である。なぜ誘惑の字が付くかといえば、すぐ近くにイエス様が荒野の試みを受けられた「誘惑山」があるからと聞いた。それを聞くと私の好奇心が目を覚ます。その第一は、イエス様がヨルダン川でバプテスマのヨハネから洗礼をお受けになり、それから荒野に導かれたとあるが、それが何処だったか、遺跡があるわけでもなく、果たしてそれが分かるのだろうかということである。ここがその荒野であるという証拠は何処にもないと思うが、イエス様もこの町を何度も通られ、町を上げて集まつたことが記されており、取税人のザアカイが救われ、目の見えないバルテマイの目が開けられたのもこの町であるから、イエス様がこの山で試みを受けられたことを知つていて、それ

が言い伝えられてきたのかもしれない。それはそれとして、
ここがそうだと信用することにしよう。ここはユダの荒野の
一部で、エルサレムの都まで三十キロ程度である。



イエス様が試みを受けられたと言われる誘惑山

もう一つの好奇心は、イエス様が洗礼を受けたヨルダン川

の場所は分からないが、そこから荒野までの距離である。こ
こがそうだとすれば、十キロ程度となる。
さて、私達はロープウェイで誘惑山に登った。そこで集会
をし、牧師の奨励を通して、主の試みをしばし偲んだ。



誘惑山からエリコを望む（城壁跡は上部の白い部分）

もう一つの好奇心があった。それはエリコの城壁である。

そこで山上でガイドの柿内さんに聞くと、あの白い部分ですと言う。意外と小さいのに驚いた。聖書では、堅固で難攻不落の大きな城壁とのイメージを持つが、昔の町はせいぜい多くて二、三千人程度だったとの事(難攻不落だったことは間違いない)。イスラエルの民は男子だけで五十万人、女子供を入れれば百五十万以上いたと思われる大群衆がこの城壁を取り囲み、相当な列の厚みをもって一日一回、七日目は七回廻つてワアーと歓声をあげた時の事を想像してみてください、中にいたエリコの人達の恐怖感が分かるでしょうと言われて、なるほどと思つた(城壁跡に行きたかつたが、行けなかつた)。

イエス様時代のエリコの町は、ここよりもつと右側のケリテ川沿いですと言われて、またまた好奇心に火がついた。ケリテ川とは、エリヤが飢饉の時にカラスから養つてもらつた所である。そして、ここには預言者集団がおり、エリヤがエリシャを伴つてここを訪れ(列王記下十六・四)、ここからヨルダン川へ行つて、つむじ風に乗つて天に召されている。

城壁の向こう側に、エリシャが悪い水の泉に塩を入れてよい水に変えたという泉が残つていて、今もコンコンと湧水し、大事な水源になっているとの事である(列王記下二・十九)。

十三 ガリラヤへ

またオンボロバスに乗つて、待つてくれていたイスラエルのバスの所へ帰り、そこから再びヨルダン川を北上した。次第に緑が増えてくる。途中で、「これが、ダヒテが緑の牧場(詩篇二三・二)と言つた牧草地です」との説明があつた。見ると、草が所々ある程度である。我々がイメージする青々として緑豊かな所とはまるで違うのだ。温暖多湿な日本が恵まれていいのか、それともここが厳しいのか。羊は近眼で群れを成すとの事であるが、ここでは放牧は無理で、羊飼が次の牧草地に連れて行かねばすぐに食べ尽してしまい、羊は育たない。もし日本が聖書の世界だったら、違つたものになつていたかもしれないと思つた。

左手にギルボア山(サウルとヨナタンが戦死した山)が見えますという案内も聞きながら、百キロほど走つて、いよいよガリラヤ湖が見えてきた。度々福音書に登場し、イエス様がここを歩かれたのかと思うと、何だか会えるのではないかと思うくらい、懐かしささえ感じる。

ガリラヤ湖はガリラヤ地方の湖という意味で、正式にはテベリヤ湖である。広さは琵琶湖とほぼ同じだが、海拔がマイナス二百メートルと低く、周辺は当時湿地帯だったとのこと。イエス様が多くの人を癒されたことを思い起こす。

今夜はテベリヤの町のホテル(石造りで趣のあるホテル。庭からテベリヤ湖がよく見えた)に泊まる。

翌日、現地六日目(四月十三日)は聖日である。この日の礼拝はどうするのだろう、各自でするのだろうかと思っっている、ちゃんと用意されていた。しかも素晴らしい企画で。

朝食後、船着場へ行き、イエス様時代と同じ形の船を貸し切り、沖へ出てエンジンを止め、ここで礼拝が始まったのである。イエス様が船の中で弟子達にいろいろお話になったことを思い出す。あらかじめ配布された歌集からガリラヤ湖に関わる歌を賛美し、団長の中島秀一荻窪栄光教会牧師(教団副委員長)がマタイ十四章二二節以下から、嵐に悩む弟子達にイエス様が海上を歩いて近づかれ、嵐を鎮め、沈みかけたペテロを引き上げられた箇所を通して、勧めをなされた。

爽やかな春の陽と風を感じ、穏やかな波の音に耳を傾け、そしてイエス様もご覧になったであろう、二千年前と変わらない景色を見ながら、御言を聞き、主の恵みを思うこの時は、正に至福の時であった。

ここから船を下りて、ゲネサネの船着場に着いた。イエス様がテベリヤから舟でゲネサネに着いた時、大勢の群衆が待ち受けて(イエス様の乗る船は決まっていたとのこと)、イエス様に触れて癒してもらおうとしたことが記されているが、

イエス様の評判はガリラヤ全土に広まっていたのだ。



テベリヤ湖からゲネサネを望む

ここから程近い丘陵地に立つ「山上の垂訓の丘教会」へ行く(とにかく聖書の名所には必ず教会が建っていて、時にはないほうが良いのと思うことがある。ほとんどが中世期に建て

られたもので、字の読めない民衆に分かりやすく絵などで説明したのだろう。この建物は山上の垂訓の八福にちなんで、八角形となっている由。この丘陵地の下の緩やかな窪地で、イエス様が山上の垂訓の説教をなさったという。下の湖の方だろうか、上の山の方だろうか。かなり広い自然の観客席で、イエス様の澄んだ声が上の方まで届いたのだろう。イエス様は風をよく利用されたとのことである。また一度の説教ではなく、場所もいろいろな所で話され、それがまとめられたのが山上の垂訓だとの説明があった。

そこから「ペテロの再召命教会」へ行く。最初はピンと来なかったが、甦られた主が、夜通し漁をして何も取れなかった弟子達にご自身を現された、ゲネサネ湖畔である。この時、裸だったペテロは上着を着て海に飛び込んだ(ヨハネ二・七)とあるが、通常、漁をするのに上着(晴れ着)は持参しない。これはペテロがイエス様の言葉を信じて、いつでも会えるように用意していた証拠だとの説明があった。

食事の後、ペテロはイエス様から「私を愛するか」と問われ、「わが小羊を飼え」と再召命を受けた。岸から上がった所に、イエス様がペテロに羊飼の杖を授けている銅像がある。

また教会の内部には、イエス様が朝食としてパンと魚を用意されて一緒に食べた食卓となったという岩があった。



甦りの主が弟子達にご自身を現されたテベリヤ湖畔

そこからまたバスに乗って、カペナウムに行く。ゲネサネとは目と鼻の先である。カペナウムとは「慰めの村」という意味だそうで、イエス様が伝道の拠点とされた地である。ここはシルクロードの経由地で、当時の軍事、経済、政治的に重

要な都市であった。ローマ軍も駐留し、百卒長も登場するわけである。会堂司ヤイロの娘が蘇らされ、取税人のマタイが召命を受けたのもここである。現在、発掘が進められ、イエス様時代の民家も出てきたとのこと。イエス様から熱病を癒してもらったベテロの姑も、ここに住んでいた。当時、二五〇〇人くらい住んでいたとのことである。

ビザンチン時代に建てられた教会跡に連れて行ってくれたが、土台石の下の方が黒くなっていた。これはイエス様時代の教会の土台石で、イエス様はこの教会で説教をなさった時、その権威に人々が驚いたことが記されている。

若干話は後先になるが、「二匹の魚と五つのパン増加の記念教会」(何でも教会である)にも行った。ここにはビザンチン時代のモザイクの絵が残されている。イエス様の時代はこの地方はまだ開拓の時で、石工と大工が多く呼び出された由。ヨセフもその中の一人で、建物だけでなく、農具や牛につけるくびきなども作ったので、イエス様の話の中にそれらが多く出てくるとのことであった。

昼食をするため、テベリヤ湖を右回りにベッサイダ(ヨハネ兄弟の出身地で、漁師の家の意)方面へ行つたが、そこでペテロフィッシュという魚の唐揚げが出た。これはイエス様が税金を納めるために、最初に釣れた魚の口から金貨を取り出さ

せた、あの魚である。説明では、この魚は湖の底に住んでおり、稚魚を口の中に入れて育てるため、出したり吸い込んだりする習性があるので、金貨を吸い込む事はあり得るとのこと。イエス様は手品を使ったわけではなく、理に適ったことを成されたわけである。

十四 ピリポカイザリヤ

カペナウムからテベリヤ湖上流のヨルダン川を北上し、ゴラン高原(中東戦争の激戦地。現在は休戦地域で国連管理)を通つて、ピリポカイザリヤへ行く。ここはヘロデ王の息子ピリポがローマ皇帝(カイザル)に献上した町で、地中海沿いのカイザリヤと区別するために、ピリポカイザリヤとしたという。このため、ピラト総督も時々ここに来たとのこと。

そういう事もあつてか、ここは偶像の町だった。私達が行つたペトラ(パンとバーミヤ神)は紀元前五十年頃できたもので、町の何処からでも見える高台に場所にあつた。イエス様は偶像礼拝の町のこの場所で、敢えてベテロに、「わたしをだれと言うか」(マタイ十六・十五)と信仰告白を求められたのである。この後、イエス様は十字架をはつきり口に出され、その道を進んで行かれる。そして、ここからヘルモン山に登られ、その御姿が真っ白く変わると共に、モーセとエリヤとで

受難について語り合つたことが記されている(ルカ九・二八)。ここはヘルモン山の麓にあり、雪解け水が地下水となつて湧き出で、ヨルダン川の水源となつてゐる。

ついでであるが、ここで日本と同じようなイチジクの下で休んでいると、柿内さんがイチジクの下に座るのは賢者のしるしですという。イエス様がナタナエルに対し「わたしはあなたがいちじくの木の下のにいるのを見た」(ヨハネ一・四八)と言われたのは、そういう意味もあるとの事であつた。

十五 ナザレへ

ピリポカイザリヤから南西に下り、ナザレへ向う。途中でイエス様が婚礼の席で水をブドウ酒に変えたカナの町(ナザレの隣町)を通つたが、残念ながら通過した。この町にはアラブ人のクリスチャンが多く、故国では迫害されるので、イスラエルに逃げて、移り住む人が多いとのことである。

さて、ナザレはイエス様が三十歳まで住まれた町である。それより以前、ナザレの一人女であつたマリヤに、御使ガブリエルが受胎告知した地でもある。ここにも「受胎告知教会」があり、マリヤが受胎告知を受けたといわれる洞窟を囲むように建てられている。何とマリヤ達は洞窟生活だつたのだ。ちなみにヨセフの仕事場も洞窟だつたとのこと。私達が考え

る以上に快適だつたそうである。ナザレは低地の泉(マリヤの泉と言ふ)を中心にできた町で、ここには城壁はなく、海拔四百メートルの丘の中腹を階段状に洞窟を掘つて、二百人程度の町が形成されていたわけである。今でもイエス様がナザレ人から突き落とされそうになつた崖があるそうである。

イスラエル全体に言える事であるが、バスで走つていて思うことは、町が山の上にてできているということである。どうしてあんな高い所に作つたのだろう(エルサレムも山の上である)、相当な不便に違いないし、第一、歳を取つたらどうするのだろうかと思ふが、生活の不便よりも防衛問題が大きいからだと思う。周囲を海に囲まれ、外国から攻められた経験のない平和ボケの日本では理解できないことである。

ここで柿内さんから教えられたことは、イエス様が十二歳になつてエルサレムの神殿へ行き、そこで律法学者達と議論をした記事(ルカ二・四一)があるが、イスラエルでは十二歳が成人であり、成人になると神の前に大人と対等の権利を持つてようになるとのこと。それでイエス様は教師達の中に入つて堂々と議論ができたわけである。

もう一つは、当時の勢力分野として、地方の教会をパリサイ人が支配し、エルサレムの神殿はサドカイ人が支配してゐたとの事。両者ともイエス様に脅威を感じたわけである。

十六 カルメル山

当初の予定にはなかったが、柿内さんと運転手さんの好意でカルメル山に行くことになった(団長が交渉してくれたらしい)。これを聞かされたとき、車中に拍手の嵐が起った。あのエリヤがバアル・アシラの預言者八五〇人と対決して勝利した、あの有名な事件に触れることができるのだ。

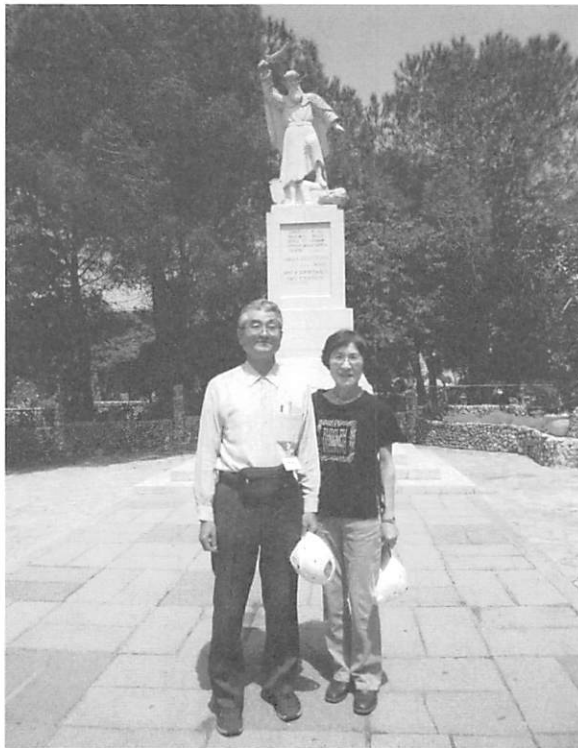
途中で多くの戦いがあったエズレル平原(士師記のデボラとシセラが有名)やサタンとの最後の戦いの場となるメギドの丘(ハルマゲドン、黙示録十六・十六)の傍を通り、と言っても何の変哲のない所ではあるが、心躍るものがある。

カルメル山は標高五四六メートルでそんなに高くはなく、当時フェニキヤ(バアル神の本拠地)と国境を成していた。エリヤはそういう所を対決の場と選んだのである。つまり相手に有利な(応援も得られる)所である。加えて、彼が火をもつて答える神を神としようと提案したのは、バアルが雷を支配する神だったからであるという。すなわち、雷をもって燔祭を焼き尽くすことができるならそうしなさいと、相手の得意技で勝負したわけである。余裕綽々と言うか、エリヤの信仰による確信である。結果は、聖書に記されたとおりである。

山頂公園にはこれらを記念するエリヤの像があった(バア

ルの預言者達を踏みつけている)。

もう一つ説明があったのは、当時のイスラエルの民が神から離れた一つの理由は、それまで遊牧民だった民がカナンに定着し農耕を始めたが、エホバの神は牧畜の神であって、農耕の神ではないと理解され、バアル・アシラの神が雷、すな



わち天候を支配する農耕の神であることから、次第に惹かれていったということがあった。そこでエリヤは、エホバの神は牧畜だけではない、天候を支配する農耕の神、いや全能の神であることを現す必要があった。そこでエリヤが祈って天

から火が下って燔祭を一瞬に焼き尽くしたとき、民はこぞって「エホバは神なり、エホバは神なり」と叫んだ。ここに大リバイバルが起り、民の心は翻ったのである。

カルメル山の山頂からは、東側にクネクネ曲がって流れるキシヨン川（エリヤはこの川でバアル・アシラの預言者八五〇人を殺した）、西の地中海側にはエリヤの祈りに答えて「手ほどの雲」が起った空が広がっている（この日は晴天だった）。

十七 カイザリヤへ

カルメル山から地中海沿いを走り、カイザリヤへ行く。カイザリヤはヘロデ王が皇帝アウグストからこの町を与えられて建設した海港都市で、カイザルを記念してカイザリヤと命名したもので、現在発掘調査がなされている。ここにヘロデ造営の宮殿があるが、総督ピラトは通常ここにおいて、エルサレムの祭りの時に治安のためにエルサレムの官邸に来ていたとのことである（イエス様の裁判の時は過越の祭りのために来ていたわけで、もしいかなかったら、歴史が変わった？）。

ピラトの後任フェリクスがパウロを裁き、ローマ移送を決めたのもここである（その場も見せてもらった）。従ってローマ軍が駐留しており、百卒長のコルネリオがペテロを招いて多くの異邦人が救われた記事が出て来る（使徒行伝十・一）。

ピリポもここで伝道し、居住もしている。

ローマの出先都市に相応しく、町はローマ形式である。映画「ベンハー」に出てくる騎馬競走の競技場（ロケ地の候補にもなった由）、大きな円形劇場（実によく声を通る。現在も使われている）などがある。

十八 いよいよエルサレムへ

カイザリヤを出て、途中でエマオを通り、いよいよエルサレムに近づく。今回の旅行のある意味、最大目的地である。

今回の旅行を辿って見ると、最初に厳しく不毛の南部（ネゲブ砂漠とシナイ山）に入ったが、それは私には律法（モーセ）そのものに見えた。そこから緑豊かな北部（ガリラヤ）に行つたが、文字通り乳の蜜の流れるカナンの地、福音（イエス様）そのものに見えた。そして最終地のエルサレムに入る。

ここで律法（祭司長、律法学者達）と福音（イエス様）が激突する。イエス様が宮清めをなさったこともあり、祭司長達は神（律法）の権威を侵す者として排除すべく、イエス様を十字架につけて殺した。しかし、イエス様はその死の中から甦つて、勝利された。今日のイエス様による福音の時代、霊的なカナンの生涯に入ることができるようになった舞台が、エルサレムなのである。私にはそのように思えた。

そのエルサレムがいよいよ近づいてきた。谷間から見上げるエルサレムは高くそびえ、近づく者を拒むようにさえ見える。人間の歴史の中で、これほど大きな出来事を経験し、そして世界に影響を与えた都市がほかにあるだろうか。私の胸は高まってくる。

ダビデは、最初はユダ族の王でヘブロンを首都としていたが、全イスラエルの王となった時、エブス人領地のここを攻め取って首都(ダビデの町)としたのは、自然の要害であったこと、ギホンの泉があったこと、ここがダビデの部族に属さない新しい領地で、北イスラエルの部族の反対を収める必要があったからだとのこと。紀元前千年のことである。その後住民の増加により、何度か城壁は拡張された。現在はパレスチナ人との同居という微妙な関係にあるが、七十万人を擁し、政治、経済、交通、宗教の要所として栄えている。

私達はまずオリブ山に行った。ここはパレスチナ人地区とのこと。今は住宅が立て込んでいるが、イエス様の時代はオリブ畑が続いていたのだろう。ここからエルサレムの旧市街地が良く見える。イエス様はこの景色を見ながら、子口バに乗って、エルサレムへ入って行かれた(マタイ二一・九)。
また、ここから「ああ、エルサレム、エルサレム」と嘆かれたのだ(マタイ二三・三七)。



オリブ山から見るエルサレム旧市街地。右手の森がゲッセマネ、城壁の下はケデロン谷、白い箱状は墓

私達はイエス様が歩かれた小道を下って行った。その先にはゲッセマネの園があった。ゲッセマネとは、オリブ絞りの意味だそうである。そこに樹齢二千年のオリブの古木が

あった。この木はイエス様が血の汗を流して祈られた姿を見ていたのかもしれない。もしそうならその時の様子を覚えて欲しいと願った。イエス様は最後の晩餐の時、過越しの祭りで飲む四杯のぶどう酒の内三杯は弟子達に分け与えたが、四杯目は分けず、またご自分も飲まれなかった。四杯目は過越しの完成を意味した。それでイエス様はゲッセマネの園の祈りで、「この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままにはなく、みこころのままになさって下さい」(マタイ二六・三九)と祈られた。原語では、「受け取りました」という意味の言葉だそうである。ここでイエス様は四杯目を飲まれ、過越しを成就されたのである。

ここにも教会が立っていた。その名も「主の祈りの教会」で、屋根は涙の壺の形をしているとか。ユダヤでは涙をためる習慣があり、マグダラのマリヤが涙でイエス様の足を洗った記事があるが、あれはそのとき流した涙だけではないとの説明があり、少し興ざめした。このほかにも「万民のための祈りの教会」という教会も建てられていた。

そこからケデロンの谷を通って、エルサレム城壁内に入る。近くに寄ると随分高い城壁である。石一つ一つに歴史の重みを感じる。

まず、神殿のあった所に行くことになった。十一時までに



嘆きの壁で祈る市民、教職者

行かないと閉まるのだという。そこはイスラム支配の地域で、マホメットがここで召天したことを記念した岩のドーム(中にはアブラハムがイサクを捧げた岩がある)との事。アブラハムはイスラムでも父祖なのである)があり、祈りの時間は外国

人が入れないからである。当然、通常でもユダヤ人は入れない（以前、シャロン首相が融和のために入ろうとして物議をかもしたことがあった）。時間に間に合って境内に入ったが、そこにはイスラムの施設があるだけで、ソロモンの神殿の跡形すらない。わずかにこの下の壁（嘆きの壁と呼ばれている）しか残っていない。しかも境内から直接には行けず、いったん外に出て、遠回りしなければならなかった。

嘆きの壁の祈る場所は、男女別々になっていた。ユダヤ教の戒律によるのだろう。黒い服を着た教師や頭に小さな丸い帽子を載せた信者が聖書のようなものを読みながら祈っていた。石垣の割れ目には、ぎつしり祈りの紙が挟まれていた。外国人の私達には何の感慨も湧かないが、苦難の歴史を歩んだユダヤの人達には切なるものがあるのだろう。

十九 十字架への道

そこからいったん城壁外に出て、エルサレムの最初の町「ダビデの町」へ行く。イエス様当時はここも城壁内だったとのこと。急な坂の町であるが、ここに祭司長カヤパの官邸があった。シオンの丘の中腹にある。ゲッセマネの園で捕らえられたイエス様は、ここに連行されて、カヤパから宗教裁判を受けた。現在は鶏鳴教会が建っているが、地下には当時の

牢獄が残されていて、その中に水牢があつて、特に宗教犯罪者はここに入れられ、拷問されたとのこと。イエス様の支持者が救出を図る恐れのあることから、ここに吊るし入れて隠したのだという。その中に入ってみたが、上に人が一人入れ



ペテロが主を三度否んだ時の像（カヤパの官邸の庭）

る穴があるだけで、下は暗黒である。何時間吊るされたか分からないが、その恐怖感は想像を絶する。イエス様は鞭打たれただけではなかったのだ。

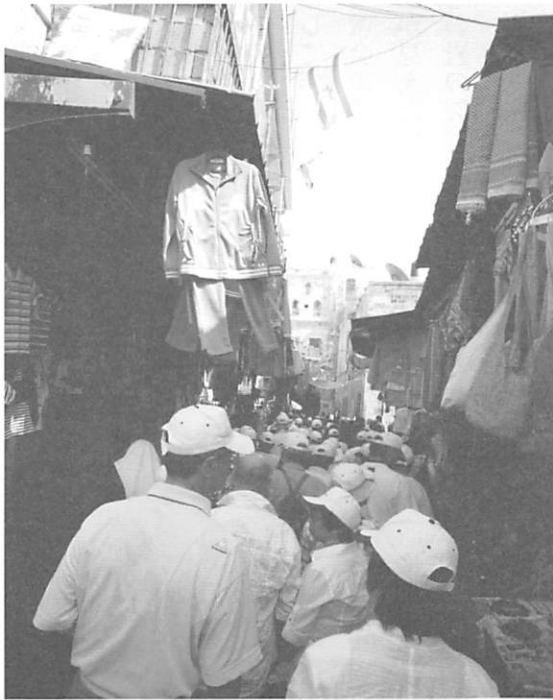
中庭に、ペテロが女中さんから「あなたはイエスの仲間でしょう」と言われて三度拒み、その時鶏が鳴いたという銅像が建っている。すぐ上に最後の晩餐をした家があったという。

ここから二千年前と同じ坂道を下ってゆくと、オリーブ山やピラトの官邸に通じる道となっている。イエス様はこの坂道を引きずられながら、随分長い距離を歩いて行かれたのである。

ピラトの官邸は神殿のすぐ北側にある。その跡地の地下にピラトの法廷となったガバタの庭が残されている。その石畳は当時のものとか。赤みを帯びた大理石だった。このすぐ前が公道となっており、そこから民衆は「イエスを殺せ」と叫んだのだ。イエス様に死に当たる罪は見出せなかったピラトは、何とか許そうとしたが、祭司長に扇動された民衆が騒ぎ立てたので、彼は鞭打ってから許そうとして四十に一足りない鞭打ちにし、イエス様を死の一步手前まで打ち据えた。ここまですれば民衆は納得するだろうと。しかし、民は納得せず、かえって暴動になりそうになったので、彼は保身と妥協のため、民衆の意のとおり、十字架につけることを決定した。そ

の間、イエス様はピラトが不思議に思うほど、されるがままであった。

こうして、ゴルゴダへの死の行進が始まった。ヴィアドロローサである。その道は思ったより狭かった。しかも、今も昔も同じ市場を通るのである。それは見せしめのための市中引き廻しの刑である。道々で罵詈謗を浴びせられたであろう。唾もかけられたのだ。頭には茨の冠をかぶせられ、鞭打たれた傷の出血と痛みは極端に体力を消耗させた。正にひん死状態である。しかもイエス様は前夜から一睡もしていない。



ゴルゴダへの道ヴィアドロローサ

十字架の重荷に耐えかねて、度々倒れられ、その度に兵士の鞭が飛んだのだ。道の途中にその様子を描いた彫り絵があった。またその先には、倒れたイエス様の顔から流れる血の滴りを拭い取ろうとする女性の彫り絵もあった。それはどれくらい距離だったろうか。人通りが多く、ゆつくりした歩みなので分らないが、十五分程度ではなかったかと思う。距離にすれば一キロ足らずである。イエス様は力を振り絞りながら人通りの多い市場(現在はパレスチナ人居住区)の中を一步また一步と進まれたであろうから、もつと時間がかかったのではないか。私は出来るだけこの時のイエス様の御心情に近づきたいと思ったが、できなかつた。私は何も持たず、観光で来ているのである。分かるうというのがおがましい。他のグループで軽い十字架を背負って歩いた人がいたが、それでも分かるはずがない。

今はゴルゴダの丘も城壁の中にあるが、当時は城壁外で、その城壁を出るとすぐ目の前がゴルゴダの丘である。今ここに聖墳墓教会が建っている。ビザンチン時代のコンタンスチヌス帝の母ヘレナが建てたものだという。ここだけはそのままにしておいて欲しかったと願ったが、止むを得ない。十字架が立っていたと思われる場所に、カトリック、ギリシヤ正教、ロシア正教が競うように祭壇を作っている。何だか情け

なくなつた。

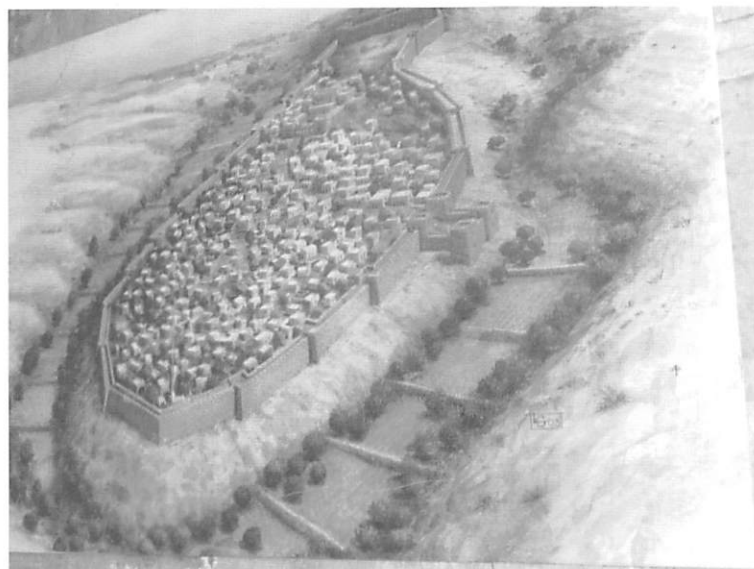
同じ建物の中に、イエス様を葬ったアリマタヤのヨセフ家の墓があつた(横穴式で、中に二体納める場所があつた)。イエス様の墓もこのすぐ近くだったのだろう。すぐ横にロシア正教の施設があり、行列ができていたので聞いてみると、イエス様の墓の入り口を覆つた石の一部だという。信者が口づけしていた。

教会の地下の部分に一部窓が開いており、そこから岩の断層が見えたが、イエス様が息を引き取つた時に地震があつた時の岩の裂け目だとの事である。

次の日は、アヤロンの谷にあるギホンの泉へ行く。泉と言つても、目に見えるわけではない。以前は表に出ていたのだろうが、ヒゼキヤ王がアッシリヤとの戦いに備えて、命綱の水源(町の外にあつた)を攻撃されることを防ぐためにこれを塞ぎ、地中に水路を敷設した(歴代志下三二・一〜四)。その水路跡を通つたが(今も一部使われているとか)、昔の人のすごさを思わされる。命をかけた戦いだつたのである。この水はシロアムの池へとつながっていた。

シロアムの池は現在発掘途中で、岸边は再現されているが、肝心の池の部分はギリシヤ正教の土地で発掘を許さず、土に埋もれたままである。

ここを出て、ゲンヒンノムの谷(写真左側の谷)を通る。ここは、昔はゴミ捨て場でゴミを焼いたことから、地獄のゲヘナからその名が付いたという。この途中に、アケルダマの地所があるという。イスカリオテのユダがイエス様を売った代金銀貨三十枚をもって買い取った地所であるが、結局彼は自



最初のダビデの町のイメージ図(ギホンの泉は城壁の右手)

殺してしまい、ここは血の地所と言われて、そのまま放置されたのである。

なお、このほかにもベテスダの池も見せてもらった。今は二十メートルほど下になっているが、まだ発掘は一部で、当時は硫黄の温泉が出て、病人のための保養所や犠牲の羊を洗った場所もあったとの事である。

二十 ベツレヘムへ

午後からは自由時間の予定であったが、ここでも運転手さん達の好意で、イエス様生誕の地ベツレヘムへ行くことになった。ベツレヘムはエルサレムより南に約八キロの近い距離にある。ここはルツ記の舞台であり、ダビデの故郷でもある。

現在はパレスチナ領で、エリコと同じように国境を越え、バスを乗り換えて行く。国境は高い塀で囲まれていた。

イエス様が生まれたと言われる宿屋は、実は岩をくり貫いた洞窟であり、飼葉桶も石製であったという。そこには例によって、聖誕教会が建てられ(これもコンスタンチヌス帝の母ヘレン建立)、祭壇が作られていた。つまり、洞窟そのものが神聖なものとして飾られており、我々に分かるようにはしていない。従ってイメージも湧かなかった。

この後、羊飼に御使が御告げした丘にも行ったが、そこに

も教会が建っていた。ベツレヘムの町も、当然ではあるが、我々のイメージとするメルヘンチックなものとは程遠いものだった。と言うことで、全体として失望する結果となった。

二一 おわりに

以上がイスラエル旅行の内容である。写真もかなりの枚数撮ったが、写真では語り尽せないものがあり、折角の貴重な体験をこのまま記憶の中で消滅させるのももったいなく思い、このような記録を残すことにしたものである。

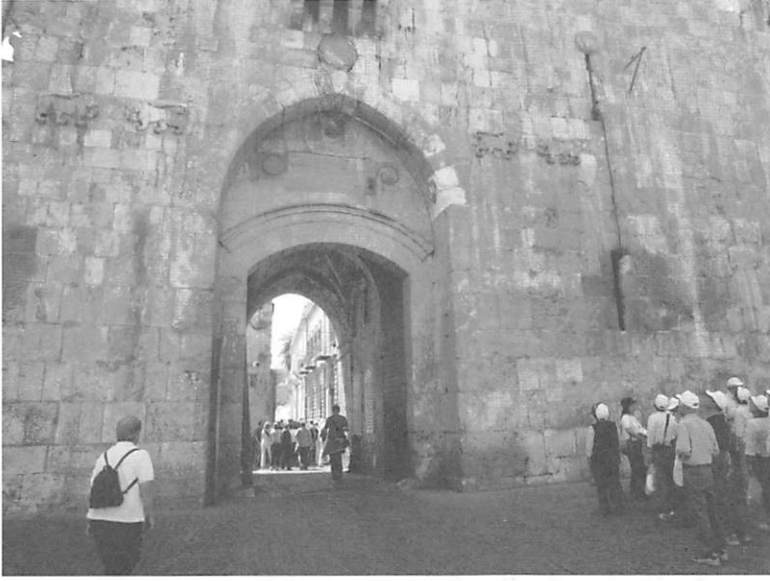
記録には載せなかったが、毎日、出発に当たってはまず祈り、見学の場所では関連の聖書が朗読され、聖書が実に身近に感ぜられた。また、同じ信仰を持つ者同志の主にある交わりも、恵みであった。初めてお会いした方にも、旧知の仲のように語り合うことができた。正に主にある兄弟姉妹である。これらは、これまでのツアーにない素晴らしい体験であった。今回の旅の目的は、聖書の世界をこの目で見、手で触れたいというものであり、その目的は達成できたと思う。しかし、部分的ではあるが、期待外れの所もあった。それは信仰の違いからであろうが、カトリックなどが聖書の有名な箇所には必ずと言ってよいほど教会を建て、神格化してしまっている

ことである。ネゲブ砂漠やシナイ半島、それにテベリヤ湖などは当時のままであるから、そこに身を置くだけで感動があり、啓示も受けた。しかし、カヤパの官邸などの建物は歴史の中で消滅、あるいは破壊され（止むを得ないとは言え）、現在は人間が手を加えてしまっているから、当時を偲ぶことも、啓示を受けることもなかったのが残念である。

エルサレム最後の夜、皆が集まって感謝会を持ち、印象に残ったことを語り合ったが、一同感激の風であった。確かに期待以上のものがあつたと思う。私もこの機会が与えられたことを感謝した。

そしてそれが終わって最後に、イスラエル政府とエルサレム市長連名の「聖地巡礼許可証」なるものが渡された。私はそれを見て、少し奇異に感じた。私達は巡礼して何か資格を得るために来たのではないという思いがあつたからである。

しかし、目くじらを立てるほどのことでもない。それはそれとして、ではあなたは願いどおり信仰が以前に勝つて深められたかと問われると、何と答えよう。知らなかつた事を知ることができた。聖書が身近なものとなり、そこに記された事は歴史的に事実であることを確認できたことは、私の信仰に有益だつたと思う。しかし、聖地に行つたから信仰にハクが付くのではない。せっかく聖地に行つても、もし信仰的



イエス様がロバに乗って入場された黄金の門

誇りになるならば、あるいは現地を見たことでそれに捉われるならば、信仰的に全ては無益となる。大事な事は、神様が私達に聖書を与え、聖霊を注いでその奥義を悟らせてくださる、それで十分であり、その事を大事にしなければならぬということである。信仰は全て、聖霊によるのである。

八幡前田教会「十大ニュース発表」

正 野 真 宏（前田）

八幡前田教会は、巻頭言で和義先生がふれておられるように、榎本利三郎先生が赴任された一九三九（昭和十四）年十一月三日が創立日とされていますから、昨二〇〇九年（平成二一年）十一月三日をもって、七十周年を迎えたこととなります。

これまでの歩みについては、平成二（一九九〇）年六月に発行された「五十年史」や、教会誌「ぶどうの木」の教会年表に記されていますが、これとは別に、平成十二年のクリスマス祝会の時から、その年の教会の行事や教会年表に載っていない信者の出来事を、「十大ニュース発表」と題して、昔懐かしの「博多にわか」や「教え唄」という形で、遊び心を少し入れた茶飲み話風に披露してきました。

わずか十年の歴史しかありませんが、これも一つの記録だと思えますので、創立七十年を機会に（残念ながら毎年とはなっていませんが）掲載することにします。

（ついでに、面白そうな落ちなども入れておきます。）

平成十二年（博多にわか）

一 榎本先生、九一歳を迎える

「御用が大変なのは、歳が九十（苦渋）じゃけんタイ」

二 教会堂、二五年ぶりに改修工事

「工事が終つて、説教の口調（空調）が良うなった」

三 ファミリー・キャンプ開催

四 都城集会、二周年を迎える

五 金生先生、正野のぞみ姉、下川路津姉結婚

「金生（叶う）と金井（叶い）で、必ず成ると信じとつた」

六 花倉洋子姉、九重で骨折。負われて下山

七 正野夫妻、カナダ旅行

「西原文江さんに会つた感激で、目がトロントしとつた」

八 植木泉姉、小仲咲代姉、正野潔兄、大学合格

九 上田武士兄、海岸に転落も九死に一生を得る

十 林一孝兄、自動車修理工場開業

「器材も自分で運んだちバイ。うん、そうか（運送か）」

平成十四年（博多にわか）

一 榎本利三郎先生、召される

「先生の信仰は山のこたつた。そりゃ、九三（九重山）じゃけ」

二 和義先生が八幡前田教会兼牧

三 河内でファミリーキャンプ

「キャンプはどう？そりゃ、可笑しくって(お菓子食って)」

四 四年ぶりに受洗者(上田兄、金子姉、淵田姉、飯田香姉)

五 正野夫妻、トルコ旅行

「トルコはよかったちなあ。そりゃ、えーでかい(エーゲ海)」

六 今村夫妻に、怜君誕生

七 林一孝兄、スズ子姉、めでたく結婚

八 金生先生ご夫妻に、頼行君誕生

平成十七年(数え唄と博多にわか)

一 知恵ちゃん、歩き出す

二 骨折者多し(大田兄、榎本姉、島崎姉、安東姉、下松姉)

「安東姉が骨折したのは、夫の里が大分(おお痛つ)やき」

三 ぶどうの木第三一号発行

四 主喜君、幼稚園へ

「運動会で栄子先生、見とれとったよう」

五 新家庭、四組誕生(藤掛兄、西山兄、貞姉、小田姉)

六 頼行君、遂に口開く

七 利三郎・百合子先生合同記念会開催

八 電動芝刈り機購入

九 教会学校一日お楽しみ会開催

十 川原姉、花倉姉、召天

十一 神の子、二人誕生(木田兄、海江田姉)

「長年妻に祈られた木田兄、おつむが一段と輝いたよう」

「信仰が一段と伸びたのは、もともと校長(好調)やき」



平成十八年〈数え唄〉

一 今年も新年聖会開かれる

「二年経った今はどうなったかなあ。元の黙阿弥かね」

二 正野潔君、結婚

三 野村末義兄記念誌発行

四 金生頼行君、今村怜君、晴れて幼稚園児に

五 林スズ子姉、受洗

六 金生雄志君、誕生

「可愛い雄志君、おばちゃん達のペットじゃないもんね」

七 利三郎・百合子先生記念誌発行

八 和義牧師夫妻、イタリア訪問

九 利三郎・百合子先生記念会開催

「私達、信仰もって歩んでいますよう。本当かいなあ」

十 堤善弘兄、下松光子姉、召天

「健康管理者がいなくなつたよう。後は自分でやってね」

平成十九年〈数え唄〉

一 金生家に、風邪台風吹き荒れる

二 飯田香姉、めでたく結婚

「二人とも小学校の先生です。家でも先生と呼ぶのかな」

三 ぶどうの木第三二号発行

四 母子室復活

「最初は母子室でした。高齢化が押し出したのかなあ」

五 今年も、新年聖会でスタート

六 和義先生、新車買い替え

七 利三郎師説教集「雲の柱、火の柱」発行

八 池田姉、綾部兄、鈴木兄、伊規須泰子師、召天

九 西山真純ちゃん、正野心愛ちゃん、猷児式

「人懐っこさが可愛かったよ。爺婆馬鹿かいねえ」

十 玄関横の土地取得

「見通し良くなって丸裸。あなたの信仰も見られてるよ」

平成二十年〈数え唄〉

一 日曜学校、久しぶりの新入生

「新しいお友達が入つた。これも主喜君効果かなあ」

二 文字先生ご尊父、召される

「お父さんも、和義先生の説教例話もなくなりました」

三 主喜君が新一年生

「成長はうれしいけど、年寄は相手にされなくなるよ」

四 大田敏夫兄、召天

「数々残した大田敏夫語録、最後は天国へ退院でした」

五 鈴木一幹兄記念誌発行

六 ぶどうの木第三三号発行

七 長田正幸兄、受洗

「速さに驚きです。さすがアジア大会優勝のマラソン選手」

八 原田シゲノ姉、召天

九 榎本牧師夫妻、イタリア、アメリカ訪問

十 安部タマエ姉、召天

「今年四人目です。天国も賑やかになりましたね」

平成二二年（数え唄と博多にわか）

一 金生家に新型インフルエンザ吹き荒れる。

二 信徒会で「聖書の失敗例に学ぶ」開始

「人の失敗を出汁にするとは、チト悪趣味かねえ」

「カインは神様から追放されて、こりゃいかいん（カイン）

ちゆうて、悔い改めたとタイ」

「ロトは住む家も失うて、ロト（路頭）に迷うた」

三 ぶどうの木第三四号発行

四 正野サカエ姉記念誌「神は愛なり」自費出版

五 小田義昭兄、急逝

「神様は順番間違えたのかな。候補者沢山いるのにねえ」

六 和義先生、狭心症で心臓手術

「心臓にステントが入って、信仰も筋金入りだよ」

七 会堂掃除後のクイズ教室

八 林信之兄、受洗

九 中村栄之助兄、二度目の交通事故

「事故の度に新車の不思議。ついでに老体の取替えは？」

「栄之助さんは奥さんに蜜蜂のごと甘かバイ。

朝から光恵（蜜へ）光恵（蜜へ）ち言うちよる」

十 大田邦子姉、伊豆の下田へ転居

「下田へ行って、しもうた（下田）と思わないでね」



八幡前田教会年表

二〇〇七(平成十九)年～二〇一〇(平成二二)年三月

(一九九八～二〇〇六年は三二号に掲載)

四月 一日 イースター礼拝

「受難週のための聖書黙想箇所」の配布

五月二七日 榎本利三郎牧師説教集「雲の柱、火の柱」発行

六月 九日 綾部時男兄召天

七月十五日 会堂母子室再開

八月 五日 玄関横土地取得完了、土地献金

八月 七日 教会学校一日お楽しみ会

二六日 玄関横土地に駐車場整備完成

九月 一日 加藤千代姉召天(元教会員)

十一月一日 召天者記念礼拝、合同記念会

十二月二日 一年の感謝会

七日 鈴木一幹兄召天

二三日 クリスマス礼拝、祝会

二三日 燭火礼拝

○ あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない。

(出エジプト記二十・三)

○ わたしたちは主を知ろう、せつに主を知るところを求めよう。

(ホセア書六・三)

○ あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべである。

(イザヤ書四三・十)

一月五～七日 新年聖会(榎本和義牧師)

二二日 大阪八尾教会東俊郎牧師召天(元教会員)

二月十三日 伊規須泰子師(戸畑教会)召天

二五日 「ぶどうの木」第三二二号発行

三月 三日 山口純和兄・飯田香姉結婚式

二九日 池田操姉召天

二〇〇八年(平成二十年)

○ 足からくつを脱ぎなさい。あなたが立っているその場所は聖なる地だからである。
(出エジプト記三・五)

○ わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右

○ の手をもって、あなたをささえる。(イザヤ四一・十)
○ わたしの愛のうちにいなさい。(ヨハネ十五・九)

二〇〇九年(平成二十一年)

一月四〜六日 新年聖会(榎本和義牧師)

三月 一日 大田敏夫兄召天

十六日 イースター礼拝、

「受難週のための聖書黙想箇所」の配布

三十日 「ぶどうの木」第三三号発行

四月 二日 阿部直好兄(榎本文子姉の父)召天

七月 八日 榎本牧師夫妻アメリカに出張

二十日 原田シゲノ姉召天

八月 五日 教会学校一日お楽しみ会

三十一日 洗礼式(長田正幸兄) 福岡大濠公園教会にて

十一月六日 召天者記念礼拝、合同記念会

二三日 安部タマエ姉召天

三十日 一年の感謝会

十二月十四日 福岡大濠公園教会八十周年記念のしおり配布

二一日 クリスマス礼拝、祝会、燭火礼拝

○ 聖霊を受けよ。(ヨハネ二十・二二)

○ 主は王となられた。(詩篇九六・十)

○ 主のいつくしみは絶えることがなく、

そのあわれみは尽きることがない。(哀歌三・二二)

一月四〜六日 新年聖会(榎本和義牧師)

二月 一日 門岡ミチ子姉召天

三月三十日 「ぶどうの木」第三四号発行

四月 五日 イースター礼拝

「受難週のための聖書黙想箇所」の配布

八日 榎本牧師入院(狭心症手術)、十八日退院

五月三十一日 洗礼式(林信之兄) 福岡大濠公園教会にて

七月 二日 同盟福音基督教団羽島キリスト教会牧師

限上正敏師、木曜会の御用

八月十二日 和義牧師夫妻、アメリカ出張(二一日まで)

九月 六日 信徒会で「聖書の失敗例に学ぶ」を開始

十一月五日 召天者記念礼拝、合同記念会

二九日 一年の感謝会

十二月一日 小田善昭兄召天

二十日 クリスマス礼拝、祝会
二四日 燭火礼拝

二〇一〇年（平成二二年）

- わが義人は、信仰によって生きる。（ヘブル十・三八）
○ 主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、
いつくしみと、まこととの豊かなる神、

（出エジプト記三四・六）

- あなたがたは、主イエス・キリストを着なさい。
（ローマ十三・十四）

二月 宇戸田由美子姉、ジャカルタ日本語教会から

転会

二月二十日 門司浩兄（澄子姉のご主人）召天

三月十三日 森田清恵姉召天

二十日 飯田恵姉、坂本達也兄と結婚

（福岡大濠公園教会にて）





2010年1月1日 福岡大濠公園教会



八幡前田教会創立
70周年感謝記念礼拝

2010年4月28日
八幡前田教会
創立70周年記念礼拝・感謝会



創立70周年
感謝会



2010年 1 月17日 八幡前田教会



2010年 1 月17日 八幡前田教会

編集後記

◎ 「ぶどうの木」第三五号をお届けします。今年も発行することができて感謝です。

◎ 第一号が発行されたのが昭和四一（一九六〇）年八月ですから、四四年経過したことになります。

最初は粗悪なザラ紙のタイプ印刷で、薄いものでした。今では紙も黄ばんで、ずいぶん古ぼけてきましたが、内容は古びず、懐かしい思い出となっています。

◎ 投稿された方のお名前を見ると、ほとんどの方が召されていることに気付きました。歴史を覚えるとともに、まさにその方の貴重な記録となっているのです。「虎は死して、皮を残す」ではありませんが、「ぶどうの木」に投稿することによって、いつまでも記念として残ることは、素晴らしいことだと思います。

◎ 皆さんが受けておられる主の恵みも、そのままにしておけば、いつとはなしに忘却の彼方に消え去って行きます。記録されれば、あなたの生きた証しとなり、多くの方々の励ましともなるのです。

まだ投稿されたことのない方、勇気を出して筆を取って紙に書いてみてください。それがあなたの証しとなります。

発行 二〇一〇年五月

発行者 福岡市中央区鳥飼二丁目二一―二六
基督伝道隊 福岡大濠公園教会
牧師 榎本和義

発行所 基督伝道隊

福岡大濠公園教会
八幡前田教会
戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社